あの子は女で、私は男で

ヘイ！タクシー！

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

男装の麗人。

彼女を表すならその言葉が最もふさわしいだろう。

孤児と言う身分からヤクザ者に拾われ、女性でありながら男性の役割を求められたが故に、男の格好を強制させられた女の子。

誰もが彼女の男装を理解していながら、それでも誰も彼女にその事を指摘しないのは、彼女の境遇故だ。

そしてそれ以上に彼女の見目麗しい中性的な男装姿は、男女問わずその背徳的な魅力で皆を惹きつけてしまうのだ。

ただひとつ残念な事があるとすれば……そんな彼女の性別が女ではなく、男だと言うことだけだった

目次

私という男 ―― 1
千棘という少女 ―― 13
左腕の故障 ―― 24
理央のいない二人 ―― 36
そして事態は悪化する ―― 48
お付き合い成立 ―― 57
親子喧嘩 ―― 66
私は私の思うままに ―― 75
襲来。黒虎 ―― 86
決闘 ―― 97
決着と一つの真実 ―― 113

私という男

私こと佐々木　理央は今、とても困ったことになっています。

「何故ですか組長(オヤジ)!?　何故坊っちゃんがあんな……しかもビーハイブの野郎の嬢ちゃんと付き合っているのを認めるんですかい!?」

私の父上が、もう嫌なんです。

私の名前は佐々木　理央といいます。もう記憶には無いのですが、私は元孤児です。橋の下で捨てられていた所を、集英組というヤクザの若頭である佐々木龍之介……私の父が拾ってくれたのがきっかけで組に住まわせてもらっています。

父上や組長、組の人達皆が家族みたいなもので、とても厳しくも大切に育てられました。同い年の若……組長の息子である一条　楽とも兄弟のように親しくして貰っています。

父上からは「お前が将来、坊っちゃんを支え守るんだぞ」と毎日のように言われ、戦闘なども仕込まれたのは少しばかり辛かったですが、それも私を信頼し頼ってくれる愛情の裏返しとわかれば頑張れました。

どこの家の者ともわからない人間に、己より大切にしている若の命を預けようとしてくれる。
その信頼がとても嬉しくて、頑張ろうと思えるのです。
ただ最近……いえ、もっと昔から悩みがあります。それが……
「おい理央！　お前なんて格好しているんだ！　いくら身内だけとはいえ若ぇ奴等もいるんだ！　はしたない格好で部屋から出るんじゃねぇ!!」
私こと男　佐々木理央は、義理の父親に女として見られているのです。

思えば違和感はありました。物心ついた時から身だしなみには注意され、若と遊んでいる時にはお淑やかにしろと怒られました。
若は良いのに何故自分だけ…と思ったこともありましたが、彼は私と違って身分が高いのだと教わっていたので素直に父の言うとおりにしていました。
それに戦闘訓練では多少服が着崩れても何も言われ無かった為、そういうものだと思っていましたし、男性にしては多すぎる礼儀作法も集英組の為にと受け入れてきました。
ただまさか……私の性別が女の子だと思われているとは気付かなかったのです。
仕方がないと思うことはあります。私は組の人や若と違って女っぽい見た目なので、

知らない人から見れば女と勘違いすることもあるでしょう。
事実、身長は１６０ｃｍと女の子の平均より大きいですが若よりは低く。どれだけ鍛えても線が細くクビレのある身体に、スラリと伸びる健康的でシミ一つ無い手足。アップスタイルに編み込んだ少し長めの髪型は女の子に見えなくも……いえ、自分から見てもそう見えます。
父上は私が女だという事にまったく疑いを持っていません。どんなに男だと言っても受け入れてもらえませんし、証明できる象徴を見せようにも……そう育てられた故か実行する勇気がありませんでした。
そうやってズルズルと真実を伝えられずに数年。私は戻れないところまで来てしまいました。

▽

「ここ最近、見慣れねぇギャング共がウチの島ぁ荒らしはじめやして……坊っちゃんも気を付けてください。理央、もし坊っちゃんに何かあったらそん時はしっかりやれよ」
「はい父上。若のことはこの理央が命を賭して守りますので」

いつものように若がリムジンで登校（組の人たちが無理やり）するのに便乗して、校門前で盛大に若を見送りする時に、父上からそんな言葉が届いてきました。校内では流石に襲われることは無いと思いますが、心配性な父上を安心させるためにもこう言っておきます。

実際襲われれば若の身は護るつもりではいますがね。学校内は平和ですので、警戒する心配があまり無いのは楽ですが。

ちなみに私は男子の制服を着させて貰っています。なんでも他のヤクザに侮られないように、常に男装させておくのだとか。私としては嬉しいのだけど、なんだか複雑です……。

組の人から離れて校舎に向かっていくと、隣からよく通る盛大な溜息が聴こえてきました。

「若。溜息するのはあまりよくないですよ」

「って言ってもさあ理央……俺はヤクザの頭目になるつもりはねえんだ。周囲の視線だって痛いし」

すごく嫌そうな顔でそう愚痴る若。まあ、あれだけ注目されれば私も嫌なので、若の気持ちは痛いほどわかりますが。

「まあ恥ずかしいのはわかりますけどね。でも実際、最近のここら一帯は穏やかじゃな

いですよ？　私もこの前戦闘に参加しましたし……父の心配もわかってあげてください」

「はぁ……いっそ、お前か竜が二代目になればいいのによ」

また溜息を洩らしながら愚痴る若。

確かに若は私の目から見てもヤクザ等の荒事には向いていないと思います。子供のころから喧嘩には弱く、スポーツも苦手でお世辞でも運動神経が良いとは言えません。性格も優しく面倒見が良いんですが、平和主義でヤクザに向いているとは思えません。

だから若がそう愚痴るのも仕方がないとは思いますし、将来の為に公務員を目指すのも理解しています。

「はぁ……静かに暮らしたい」

そう若が3度目の溜息を吐いた直後でした。

空から美少女が降ってきました。

「え」

「げ」

「ッ若！　危ない!!」

上空に何かが現れた気配を察知した私は慌てて空に顔を向けます。すると若の近く

にある塀の上から、一人の少女が若の上に落ちてくるのを確認。
何とか盾になろうと若を押しのけて、若のいた位置に私が代わった時には。すでに目の前まで迫った脚とそこから見える純白のパンツが――――
「ぶッッ!?!!」
「キャア!」
顔面に入るところだった蹴りをギリギリで首を動かして回避するのですが、人ひとり分の体重が顔に乗っかってきて、さすがに支えられず倒れてしまった。
「いたた……あっごめん! 急いでたから!」
胸の上あたりに乗っかっている人物から声がかかりますが、頭を痛めたせいで声が出ません……。
そしたら彼女は私の上から退くと、脱兎の如く校舎へと駆けて行きました。
「ほんとごめんなさい! 私いそいでるから!!」
ごめんなさ〜い!! という言葉が遠くなっていく。それが聴こえなくなってくる頃にようやく頭が回復して、痛みが無くなりました。
「ふう……ひどい目に遭いました……あ、そういえば若は」
私はさっきの事故（集英組としての戦闘で慣れた）を片隅に追いやて、突き飛ばしてしまった若の方に慌てて目を向けます。

そこには盛大に吹っ飛ばされてボロボロで地面に突っ伏した若の姿が。
「す、すいません若〜〜!!」
とても悲しい事件でした……。

▽

教室にたどり着くと、私は女子の皆さんにとても驚いた反応をされてしまいました。
「おはよ〜理央く…ってどうしたの!?」
「顔が真っ青じゃない！　体調悪いの？」
「いえ、大丈夫です……」
「……なんで俺のことは誰も心配してくれないんだろう」
若が小声で何か言いていたような気がしましたが、女子の皆さんの声にかき消されて聞こえませんでした。
というか、先程やってしまった私のミスのせいで若に怪我をさせてしまった私は、周

りの声を聞けるほどの余裕がまったくありません。
常備していた救急キットで若のかすり傷などを治療しましたが、やってしまった事実は変えられるわけもなく……。
流石に死んで詫びようなどと重いことは思いませんし、長年一緒にいるおかげで若がそれを望まないのも知っていますが……気持ちは別です。
護衛対象を護衛が傷つけるなんて前代未聞です。父になんて言えばいいのか。
心配する声を掛けてくれる女子の皆さんになんとか挨拶を済ませ、自分の席で突っ伏します。そうすると、先に席についていた若から声を掛けられました。
「いつまで卑屈になってんだよ理央。俺は気にしていないって言ったろ？」
「そんなこと言ってさっきまで不機げ……あれ？　ほんとに機嫌治ってます？」
機嫌の良い調子で掛けられた若の声に驚いてそちらを見れば、何故かデレデレ顔の若がいました。え、なんで？
疑問に思っていると若の後ろの席から声を掛けてくる人物・若の友達の舞子　集さんが、私にその答えを教えてくれました。
「おーっす理央。楽は今、小野寺に心配されて喜んでんだ。だから何があったか知んねーけどそんな落ち込むなよ」
「こ、声がでけーよ集！」

「あ、集さん……ああ、だから機嫌がいいんですね」
どうやら若の思い人の小咲さんが声を掛けてくれたことで機嫌が直ったらしいです。本当にありがとうございます!!
ちなみに小咲さんとは、とてもお淑やかで男子に人気のある女性です。
若が好意を寄せているのを知って、彼女を若に振り向かせようと近づいて声を掛けたらお友達になったという良い人過ぎる人物。
あまりにも純粋で人が好過ぎて、若の為とは言え邪な思惑で近づいたことを後悔しています。本当にすいません……

私が集さんからの朗報を聞いて胸を撫でおろしていると、担任の日原　教子先生が教室に入って来て朝のＨＲが始まります。
すると入って来て早々、先生から転校生の話が出てきました。
「これから転校生を紹介するから～……はいはい、そう騒ぐな、さっさと紹介するぞー。じゃ、入ってきて桐崎さん」
先生がざわつくクラスの皆を宥めながら扉の方にそう声をかければ、ガラガラと響く扉の音。そして入ってきた人物にクラスの皆が再び歓声で荒れました。
外国人と思われる明るく自然な色合いの金髪に、スタイルが良く顔も美人な女の子。

ええ。どこかで見覚えのある顔です。

「初めまして！　アメリカから転校してきた桐崎千棘です。

母が日本人で父がアメリカ人のハーフですが、日本語はこの通りバッチリなので、みなさん気さくに接してくださいね！」

声も聞き覚えがありますね。というか今さっき聞いた声です。

塀から突如現れた女の人――

「ん？」

ざわついているクラスの人たちを眺めていた彼女は、私の所で目が止まって何かに気付いたような反応を見せます。

「あ――――――――――――――――!!!」

が、突然椅子を倒す音を鳴らして立ち上がり、大きな声で叫ぶおかしな人が現れたことで目がそちらに逸れてしまいました。

誰ですかいったい……曲がり角でパンを咥えた少女とぶつかって奇跡的にパンツを見てしまう空気の読めない主人公のような声を出す人は……と、私もその人物を見ようと後ろを振り返れば。

指を差した状態で、偶然今朝出会った少女がなぜ転校生としてここにいるのか驚いている鈍感系主人公みたいな反応をする男の人が。

ごめんなさい、若でした。
「はい？　あんただ――――」
「朝の女通り魔!!」
桐崎さんが奇行に走る若を見て、首を傾げながら誰なのか若に尋ねようと声を出した直後。それを遮るように初対面の女性に悪口染みた言葉を放つ若が……
「わ、若？　おちつ――――」
「ちょ…！　なによ女通り魔って!!」
若を止めようと声を掛けるも、桐崎さんの声にかき消されました。
「いきなり塀の上から襲ってきやがっただろ!!」
「言い掛かり止めてよね！　だいたい私がぶつかったのはあんたじゃないじゃない!!」
当然、桐崎さんからして見れば、あまり関わりの無い人に暴言を吐かれたので反論するでしょう。が、それに対して更に反論して言い返す若が。
若……気持ちはわかりますが、ぶつかったの私ですし……原因は間違いなく彼女ですが、桐崎さんにしてみれば若は赤の他人なんですから、そんないい方したらもっと……ああ、若。いったん落ち着きましょう。突き飛ばしたことについては本当に謝りますからもうそこらで止めましょう。桐崎さんも落ち着いて……
私の心中など知ってか知らずか、冷静さを失った二人はどんどんヒートアップして言

い争い続けます。当事者であった私はおろか、クラスの皆も二人の剣幕について行けず。

そしてとうとう、桐崎さんを怒らせる若の一言が放たれました。

「それが謝っている態度かよ！　この猿女!!」

その一言を最後に、若は空を飛んで物言わぬ人形へと変わってしまいました、まる。

私は、父上になんと弁明すればいいのでしょう……

千棘という少女

「私が若を必ず護ります」

そう話す彼女に対して、俺が引け目を持ったのはいつの頃だっただろう。

俺は小さい頃にある約束をした事とは別に、一人の少女が誓いをしたのだ。

『必ず護る』

いつの間にか竜に拾われた幼い頃の彼女は、その約束を守るために血の滲むような訓練を行っていた。とはいえ俺が彼女を知ったのは、彼女がウチに来てから三年くらい経った後だ。確か……8年前だったか。

ある日親父に呼ばれて親父の部屋に行ったら、そこには親父と竜と知らない女の子がいた。今とは違って髪は短かったけど、とても可愛い女の子だったことは覚えている。

その時に初めて彼女が俺に言った言葉が、『必ず護る』だったんだ。

▽

「さっきはごめんなさい！　私本当に急いでたの!!」

そう勢いよく頭を下げる桐崎さんが私の目の前にいて、私は今とても困っています。

あの後は結局何だかんだあって、先生が復活した若と桐崎さんを仲が良さそうだからと隣同士の席にしていたらしいのです。

らしいというのは、本日2度目の若が吹っ飛ばされる事態に私の心が保たず、意識が遠くへと逝ってしまっていたからで。ＨＲが終わるまで私は遠い世界へと旅立っていました。

そして私が覚醒するや否や、若の隣つまりは私の後ろの席になった桐崎さんが私の前にわざわざやってきて、冒頭の頭を下げるに事態へと発展したのです。

「あ、頭を上げてください桐崎さん……私は怪我も無かったので大丈夫です。ただ……私だから良かったですが、もしこれが他の人だったら大惨事になっていたかもしれないので、今度からは塀を乗り越えたりしてはダメですよ」

「うう……ごめんなさい」

とりあえず私は気にしていないこと。後は私が庇っていなかったら若が危なかったことを考えて彼女に注意すれば、彼女は反省してくれました。

どうやら根は素直なようで、落ち着いて話せば怒鳴ったりせず、自分のした危険行為

を顧みたりできる人物でした。
少々手が出やすいのかもしれないけど、一般人が持つ常識の枠を出ないので、若の命を脅かす人物と危険視しなくてもいいでしょう。
それに……
「はッ、怒られてやがる。これだから猿は」
「なんですって!?」
「ゴハッ！　て、てめぇいい加減すぐ手を出すのはやめろこの脳筋ゴリラ！」
これは若の自業自得です。
あらかた若と口論していた桐崎さんですが一度落ち着くと再び私の所に戻ってきました。が、何でしょうか？　私の前に来たのは良いのですが、何故か躊躇ったようにモジモジと手を擦っています。
あざとい……けど可愛いですね。
「どうしたんですか桐崎さん？」
「えっと……ね？　その……さっき貴女に酷い事したので今更なんだけど……名前教えてもらってもいい？」
そういって意を決したように告げる彼女。なんだか、どこかで見たような姿を幻視してしまうのは……気のせいでしょうか？

……っとそんなこと考えている暇ありませんでした。桐崎さんが私の返事を中々貰えなくて不安になっています。

「私の名前は佐々木理央といいます」

「佐々木さんね！　ささき、ささき……よし！　覚えたわ！」

とても元気があって見ているだけで微笑ましいですね。無邪気と言うか……でもそこが彼女の魅力のようです。

最初は若に手をあげた人だからと少し警戒していましたが……大丈夫そうですね。

「佐々木ではなく、理央と呼んでいいんですよ？　他の皆さんからも理央と呼ばれていますし」

「ほんと!?　じゃあ私のことも下の名前で呼んでほしい！」

「わかりました。千棘さんですね」

こうやって笑顔で話す千棘さんに私は和みながら話していると、斜め後ろの席で若の叫び声が聞こえてきました。

敵襲!?　と慌てて振り返れば、そこには絶望したような顔で若は立ち上がっています。

「無い！俺のペンダントが無くなってる!!?」

そう叫ぶ若の声を聴いてどうやら敵襲ではなかったことがわかり、こっそりホッと息

を吐きだす私。
いくらビーハイブとの抗争があるとはいえ過剰反応になっているかもしれませんが、さっきから千棘さんに吹っ飛ばされる若を見ていたから張りつめているんです。
だから若。そんなことで叫ばないでくださいと一瞬思ってしまった私を許してください。……本当に、ごめんなさい。

その後、ペンダントを無くした原因が今朝の彼女の襲来に因るものだと気づいた若が、千棘さんに手伝ってもらう約束を取り付けて。
放課後に喧嘩しながら探しているだろう二人を想像しながら、私は若の手伝いをせず屋敷に向かって先に帰っています。
本来なら若の手助けを私もするのですが、今はビーハイブの者達と交戦中。
戦力を求められている私が行かないわけにはいかないのです。
若の送り迎えを護衛したいのですが、あちらには既に私の顔もバレてしまっています。だから屋敷の中か学校以外では、あまり若と接しないようにしないといけないのです。
そういうわけで、私は一人屋敷への帰路をトボトボと歩いています。

ああ……帰りに可愛らしく手を振って別れを告げる千棘さんが遠い世界の住人に思えます……。

私が屋敷に着けば、そこには既に戦闘準備を終わらせている組の皆がいました。

すると、その中心にいる父上が私の気配に気付いたようで、私に声を掛けてきます。

「おう帰ったか理央。これから巡回じゃけぇ、お前も準備しろ」

「はい父上」

いつもと様子の違う、ドスの利いた声で私に話し掛けてくる父上。彼の様子が、この後に起こる血みどろの戦争が起きる事を如実に理解させられますね。

組の下の者が私に近付いてきて、大振りな刀を私に渡してきます。私はこれを脇に差し、次いで制服に忍ばせていた短刀も脇に差します。

本来なら私も皆と同様に和服を着るのですが……今はそんな余裕も無さそうなので諦めます。

ビーハイブの彼等がいると思われる場所は廃墟の工場だったり、人気の無いビルの裏道。

先日交戦のあった場所には多分、かなりの戦力が投入されているでしょう。当然私もそこに行きます。

明日をも知れぬ我が身。ですが、捨てられたあの日から私の覚悟は既に出来ているのです。

であれば、私は命を賭してでも……賭けたくは無いですが。できれば生きたい。それでもって恋人が欲しいです。

我ながら締まらないですね……

▽

「ふうあ～……」

洋風の屋敷のとある部屋。女の子らしい装飾で彩られた室内で、可愛らしく欠伸を洩らす少女。桐崎千棘が机に向かって椅子の上に座っていた。

机にはペンとノートが置かれている。ノートには人の名前とその人の特徴が書き綴られていた。

「あんまり埋まらなかったなぁ友達ノート。それもこれもあのモヤシのせいよ。アイツのせいで理想の友達作り計画が台無しになったじゃない！」

そう文句を呟く彼女は、転がしていたペンを手に取ると再びペンを走らせる。ノートに書かれた一条　楽という文字の下に、綴られた特徴が悪口で埋まっていく。

しばらく悪口を書いて満足した彼女は、ペンを止めて再び欠伸を洩らす。

（ふぅ……まあ、いいわ。こっちに来て初めて友達になってくれた理央ちゃんとも仲良くなれたし。滑り出しは順調！）

グッと拳に力を込める彼女。その様子はいくら転校初日に友達ができたとはいえ、並外れた彼女の嬉しさが伝わってくるようだ。

（でもなんであの子、男子の制服着てたんだろ？　それに妙に男子の姿が似合っているっていうか……）

彼女が思い出すのは、今日彼女が起こした不注意がきっかけで出会った理央の姿だった。

中性的でスッと目鼻立ちの整った美貌。身長は平均的な女子より高いが男子よりは確実に低く、身体の線も細い上に女の子らしい体の丸みを帯びている。髪は複雑に編み込まれたアップスタイルに纏められていて、うなじから見える白い肌は女の子である千棘ですら色気を感じてしまうほどだ。

とはいえ理央は明らかに男子には見えず、制服姿はまさに男装している女の子と言っていい。洗練されたように美しい姿勢やそのしぐさは、男子の制服を着ているのに女性

特有のらしさが浮き彫りにされてしまっている。
（もったいないな……そういえば鵜も男の子の格好ばっか着てるし……ん？）
しばし千棘が理央について思考に耽っていると、部屋の外からドタドタと騒がしい声が部屋の中に届いてくる。
その声の量は一人二人ではなく、何十人と男の声が聴こえてくるのだ。
「はぁ……またあいつ等何かしたわね」
千棘は少し憂鬱そうに溜息を吐きながら立ち上がった。そのまま部屋を出て広く空いた廊下を渡り歩けば、下の階に続く階段が見えてくる。
どうやら階段下の広間に男たちはいるようで、階段に近づいて行けば騒ぎの音がどんどん千棘の耳を強く震わせる。
「あんた達さっきから何騒いでるのよ」
「あ、お嬢！」
千棘が階下に降りて近くにいた男の一人に話しかければ、彼女に気付いた男たちが頭を下げて千棘に挨拶する。
彼らは皆マフィアのような風貌をしており、千棘が見る限り男たちは皆傷を負っていた。まるでどこかの勢力と戦争をしたかのようである。
「いやぁ～さっきまで俺等、集英組のヤクザ共とドンパチやって来ましてね。ちょうど

今帰って来やしたんですよ」
「またか……それはそうと、今日は一段と怪我してきたわね」
「ああ、それは――――」
「そいつらが未熟者だからですよ、お嬢」
男の声を遮り、千棘にそう話しかけてこちらに向かってくる男がいた。
ピンクのスーツと黒いワイシャツを羽織り、銀髪にメガネを輝かせたその人物は千棘に笑顔で近づくと、恭しく跪いて頭を垂れた。
「お嬢。不肖クロード、ただいま帰りました」
「はいはいおつかれー……でも珍しいわね？　あんたは別にしても、皆がこんなに怪我するなんて」
千棘はクロードと名乗る男の大袈裟な振る舞いを適当に流しつつ、疑問になったことを素直にクロードに尋ねる。すると彼は先ほどまでの笑顔が一転して無表情になり、中指でメガネの位置を調節しながら忌々しい物を見たかのように声を出した。
「少々面倒なクソ共（ヤクザ）が現れましてね。私が敵の主力と相手をしている間に、敵側のガキ一人に部下がやられまして……まあ未熟者たちとは言え、その男は他の連中よりできるのも事実。誠士郎ほどではないにしても、誠士郎と同世代の男であれだけ動けるとは」
「フーン……」

「ですが安心してくださいお嬢。奴はこの私が直々に相手をして左手を撃ち抜いたので。しばらくそのガキも満足に動けないでしょう」

千棘はクロードの話を聞いていて少しばかり顔を顰めた。

話を聞く限り、クロードは千棘と年の近い少年の腕を撃ったのだ。そういう世界だと彼女自身も知っているが、それに対して思うところがあるのも事実。

特に彼女も、先ほどクロードが発言していた誠士郎という知り合いがこの世界で殺し合いをしているのを知っているだ。それを思うと心中穏やかではいられない。

気分が悪くなった千棘は彼らがいる空間から早々に離れ、自分の部屋へ戻る。

ベットに倒れこんだ彼女は天井を見上げてポツリと息を吐きだした。

「はぁ……私がマフィアのボスの娘だってバレたら、また皆怖がるよね……今度こそバレないようにしなくちゃ」

脳裏にこの一日で不愉快になった男の顔と新しくできた友達の顔を思い出しながら、彼女はゆっくり瞼を閉じるのだった。

左腕の故障

「いッ――――――ッッたぁ……！」
「大丈夫か理央!?」
おはようございます。理央です。
先日の夜、ビーハイブの人たちと戦争と言う名の殺し合いを行い、私は左腕を銃弾で撃ち抜かれる怪我を負いました。
そのせいで、いつものように無意識に左腕を動かしただけで激痛が私を襲います。超痛いです。
ただ怪我の内容自体は組の医師しか知らないですが。
「え、ええ……左腕をあまり動かさなければ何とかなりそうなので」
「無理すんなよ。今日は俺が鞄持ってやるから。というか休めば良かったのに……」
痛みを誤魔化しながら何でもないように若に返答を返すのですが、どうやら誤魔化し切れなかったようです。心配そうに顔を覗き込んでくる若の顔が目に入り、とても申し訳なくなります。
若が私の手提げバックを持とうと手を伸ばしてくるのを右手で抑え、私は首を振って

断りました。
「本当に大丈夫です若。鞄は右手で持てますし、この程度で休むような軟弱な鍛え方はしていませんので」
嘘です。痛みで背中は汗びっしょりですし正直めっちゃくちゃ休みたいですが、休んだら若や組の皆に心配を掛けてしまいますのでそれはできません。
だから私は何でもないように見せるために、痛みを我慢しながら左手を動かしてアピールします。
「――――ほら若。一応動くんですからそんなに心配しなくても大丈夫ですよ」
「そうか……だけどヤバくなったら俺にちゃんと言えよ?」
そう言って再び前を向く若。
どうやら上手く誤魔化せたようで、若は歩みを止めていた足を再び動かして校舎の方へ歩いていきます。
ホッとした私もそれに続いて校舎の中に入り、そのまま下駄箱へ向かいます。
……が、やはり片腕が使えないととても不便です。まさか、靴を取って上履きと交換しその上履きを履くという行為が、こんなにも手間がかかるとは……。
流れ作業のように行ういつもの行為が、今回は一度バッグを床に置くところから始まり、上履きを取り出して床に置き、その後靴を持った状態で上に開ける方式の下駄箱扉

を開ける。
ツラい……そして面倒です。
この流れ作業にいつもなら１０秒掛かるか掛からないかで終わるはずが、今は３０秒掛かりましたからね？　いつもの３倍ですよ。最悪です。
それもこれも、あの化物メガネのせいです。なんなんですかアイツ。父上と互角以上に殺り合うとかバカなんじゃ無いですか？　死んでください。
そうやって表情は取り繕いながら心ではあのメガネを罵倒していると、ようやく教室に辿り着きました。
今日は支度に時間がかかった私のせいで遅刻ギリギリです。
「あ、理央ちゃんおはよう」
「おはようございます千棘さん」
教室に入って扉から最も近くにある私の席に鞄を置けば、私に気付いた後ろの席の千棘さんが手を振って挨拶してくれます。
相変わらず容姿が驚くほど整っていて、なんだか眩しく感じてしまいます。
あれですね。このクラスの一番かわいい女の子と言えば小咲さんなんですが、彼女は別ベクトルの可愛さがあります。
小咲さんがおっとり癒し系可愛い子だとすれば、千棘さんは目の覚めるような美人さ

んですね。
「よう」
「……私に話しかけないでって言わなかったかしら、もやし？」
そんな彼女も、私に対してはとても友好的な感じなのに、若が挨拶すれば突然機嫌が悪くなります。
そしてそこから流れるように始まる罵倒の応酬は、逆に仲の悪さが一周して仲良く見える不思議です。
「……仲良いですね」
「そんなわけあるか!!」
おお……！　息もピッタリです。ますます仲がよろしく見えます。

その後授業が始まっても二人は相変わらずで、外国住みだった千棘さんが現国の授業に四苦八苦していたのを見ていた若がノートを渡せば何故か喧嘩になり。
飼育係になっている二人が動物の世話をしていれば意見が真逆に割れてまた喧嘩。
端から見ていた私はそれをコントを眺めている気持ちでした。
そして放課後。
戦闘に参加できない私は今日の抗争に不参加にさせてもらい、二人のペンダント探し

を手伝うことになったのです。
「ねぇ理央ちゃん」
「なんですか?」
ペンダントを探している途中で千棘さんが話しかけてきたので彼女の方に目を向ければ、千棘さんは心配そうな目で私を見ていました。
「さっきから左腕庇ってるように見えるんだけど……怪我でもしたの?」
「あっ……」
しくじりました。普段の生活ではバレないよう振る舞っていましたが、さすがに地面に手をついて物を探す作業となると、左腕を庇うのが露骨になってしまいました。
いえ、今はそんなことよりも千棘さんが若に報告しないよう言わなければッ。
「えっと……ちょっと昨日の夜に怪我をしてしまいまして。でも大したことでも――――」
「やっぱり!　大丈夫!?」
千棘さんが私の声を遮って慌ただしく近づいてきました。って顔が近ッ
「どこ?　やっぱりすごく痛いの!?」
「いえ、そこまで痛くないですよ。ちょっと違和感があるくらいで」
千棘さんの顔が近い事に恥ずかしくなって顔が熱くなるのを感じながら、取り繕うよ

うに私は否定の言葉を返します。
ですが彼女は心配そうな表情を変えようともせず、じっと私の左腕を見てきて少しやりづらいです。
「……ねぇ。今日は帰った方がいいんじゃない？　なんだかとても辛そうだし、我慢は良くないわ。ちょっともやし～!!」
『ああ?!　なんだー!?』
遠くの方で若の声が聞こえてきます。って若に言っちゃダメです！
「理央ちゃん体ちょッ」
「なんでもないです若！　ペンダントらしき物が見えただけで勘違いでした！」
私の運動神経全てを駆使して千棘さんの口を全力で塞ぎ、若を何とか誤魔化しました。
危ない。超危なかった！
どうやら上手く誤魔化せたようで、若から返事が返ってきて私はそっと息を零します。
すると手にくすぐったさを感じて少し驚きながらそちらを見れば、大人しく私に口を塞がれながら疑問の表情でこちらを見てくる千棘さんが。
冷静に考えればこれってセクハラじゃないですか？

そう気づいた私は慌てて彼女の口から手を放します。
「ご、ごめんなさい！」
「ぷはぁ……驚いた。いきなり口塞いでくるんだもん」
そう言って彼女は大きな目を丸くさせます。
ただその姿は私に対して警戒している色が見えず、逆に警戒心が無さ過ぎてこっちが心配してしまいそうです。
「で、どうしたのよ？　いきなり口なんか塞いじゃって」
「えっと……若には怪我のことを報告しないで欲しいんです。あ、若とは楽さんのことです」
「……なんで？」
千棘さんがご尤もな疑問を私に尋ねてきました。まあ普通そう思いますよね。
ただ、ほとんどの学校生徒が私たちの事情を知っているとはいえ、今はあまり若のことがヤクザだと広まる話題をしたくないのです。
だから千棘さんには心苦しいですが、すべてを伝えるわけにはいきません。
「その……彼に心配を掛けたくないんです。彼とはよく一緒にいるので、そういうのをあまり伝えたくないというか……」
「ふーん。そっか」

とりあえず真実を暈しながら話せば彼女は納得してくれたようで、わかったと頷いてくれました。

「でも無理はしない方がいいわ。私が送ってあげるから今日はもう帰らない？　私も理央ちゃんが心配だし」

しかし、そう言って私を帰そうとしてくる彼女。

その千棘さんの様子に、なんだか気迫を感じてしまいます。しかも善意１００％だからＮＯとも言えず……

結局、その圧に根負けした私が若に声を掛けて帰ることになってしまいました。

そして次の日。

今日は最悪にも体育がある日です。もちろん若に心配させないために私も参加します。

そしてさらに最悪なことにも、授業内容が鉄棒……両手を使う物です。

「理央くーん！　補助お願いしてもらっていいー？」

クラスの女の子の一人が私にそう声を掛けてきます。

私はよく女子の手伝いをさせられるのですが、何故なんでしょうかね。いえ、頼られるのは嫌いではないですし、女子の皆さんから接してもらえるのは男子として嬉しいで

す。

ただ……できれば今日は止めて欲しかったです。マジで左手痛い。

とはいえ断ったら若に怪しまれますし……やるしかありません。

「キャっ!!?」

「おっと」

先に女子の方から始まった鉄棒。

クラスの女子の皆さんは運動神経が良いのですが、ちょっとおっちょこちょいの人が多いみたいで補助する回数がとても多いです。

一応マットも敷いてありますが、危ないので結局私が彼女達を手助けする形になり。

今も鉄棒から落ちた一人の女子を、右腕で落ちる速度を去なしながら両手でお姫様抱っこしたばかりです。

痛ぃ

「ッ……大丈夫、ですか?」

「はわわわッ、ひゃい大丈夫でし!」

「フフッ、噛んでますよ」

失敗した恥ずかしさからか、顔を赤く染めて腕の中に収まる女子の岩橋さん。

その姿が少し可愛らしく、噛んだことを茶目っ気を入れて指摘すればものすごく真っ赤になりました。可愛い。

私から離れて凄い速度で女子のグループの中に入っていく彼女を一通り眺めて、痛む腕を我慢しながらさあ次だと並んでいる女子の方に振り向きますと。

「はい！　つぎ私です！」

ビシッと手を上げて次は自分の番だと主張する千棘さんが、列の前で立っていました。

堂々としたその姿勢に一瞬面食らいましたが、元気があって微笑ましいです。

ちなみにですがウチの鉄棒は２５０ｃｍと、女子にとってみればかなり高いです。なので鉄棒を掴む人は私が一度持ち上げてから鉄棒に掴まるといった所作が入るのですが……

驚くことに千棘さんは助走して跳躍すると、２５０ｃｍ上にある鉄棒をしっかり掴んだのです。

そしてその勢いを利用して回転し、体操選手顔負けの大車輪を見せた後に鉄棒から手を離して地面に着地します。

その見事な技にクラスの皆が湧いて拍手の嵐を送りました。

というか、私の補助必要ありませんでした。

「凄い桐崎さん！」
「ねっ！　もしかしたら理央くんと同じくらい凄いんじゃない!?」
皆が思い思いに彼女に称賛を贈る中、一人のクラスメイトがそんな話をしました。
あ、ヤバイと思った束の間。その言葉が周りの人にも聞こえていたらしく、調子の好い男子が私に野次を飛ばしてくるわけです。
「こりゃあ負けられないな理央さん」
「ああ、今度は理央さんの凄技を桐崎さんに見せてやれよ！」
そうなるとクラスの皆がそれに乗っかるわけで、今は女子の練習時間なのに私がやらなければならない雰囲気に。
私も男です。皆の期待が籠った視線を浴びてそれをしない選択しなど普段ならありません。が、今は左腕が……
あれよあれよという間に鉄棒の前に立たされる私。
こうなったら腹を括るしかしかありません。私は男。我慢すればなんだってできる！
千棘さん同様に私も助走して跳躍し、鉄棒を掴みます。
一瞬激痛で視界が真っ白に染まりますが、なんとか堪えて手を伸ばし、そのまま回転。
回る視界の中、一瞬を狙って鉄棒から手を離し、空中で体を捻ることでクルクル回り

ながら最後に着地。

重い衝撃が私の足裏に伝わり、上手く大車輪宙返りが成功した事を理解させられます。

……やりきった。あの激痛の中、私はやりきりました！

汗でびっしょり濡れた背中に、張り付く体操服がまったく気になりません。後ろから聴こえる歓声も、何処か遠くの世界のように感じます。

なんだか世界が黒く染まっていくのが気になりながら、私はゆっくり瞼を閉じました。

理央のいない二人

気持ちのいい朝がやってきました。おはようございます私。

というのは嘘で、気分は最悪です。腕が痛いですし熱で身体がダルイです……。

やはり鉄棒の無理が祟ったせいでしょうかね。私はあの後倒れたらしく、結果傷口が開いて容態が悪化。倒れてから一週間も経ってしまいました。

若には怒られ、組の皆には心配され。

それに、一番心に響いたのが父上の泣き顔です。

怒られると思ったのに、父上は私に泣きながら頭を下げて謝罪を繰り返したのです。

「すまん！　すまん理央！　俺があの時、あの糞眼鏡を逃さなかったら!!　お前に過剰な期待をして無理させちまった！　俺は……俺はお前や若になんて償いをすればいいんだぁ!!」

もうギャン泣きです。言葉も謝罪やら後悔やらで支離滅裂なことばかり言い出しますし……。

でも、父上を悲しませてしまった。

それだけは私の心に重くのし掛かるのです。これならまだ怒られた方がマシです。

ちなみに若から聞いたのですが、千棘さんからお見舞いの手紙などが来ているそうです。

なぜ手紙なのかと言うと、流石に彼女をこのヤクザの巣窟に招待させる訳には行かなかった若が、気を利かせてくれたお陰なのだとか。

読んでみると、私の安否について心配していることや　学校の近況等が書かれています。

私に対する優しさが伝わってきてとても嬉しいです。

ただ近況については　若から手紙に書かれていること以上に聞かされるので申し訳なくなるのですがね。

最近では千棘さんがクラスメイトの女の子達に若と付き合っていると勘違いされてしまったとか。

それが原因で若と大喧嘩に発展してしまったらしいのです。

二人とも仲が良いですからね……私に送る手紙を若に渡したり、放課後の二人っきりで何かする様子が勘違いを生んでしまったのでしょう。

私が原因なのでとても心苦しいです……

早く熱を治して学校に行って、千棘さんにお礼と謝罪をしたいです……。

「もやし。今日も理央ちゃんは学校に来れないの？」
楽が教室に辿り着いて自分の席に着こうとした直後、隣の席に座る千棘が彼にそう声を掛けた。
その顔は心配と楽に対する不満そうな表情が浮かんでいる。おそらく、大喧嘩した上に話したくないと宣言した楽に話しかけるのは不満だが　理央の安否だけは気になって仕方がないといった様子が顔に出てしまったのだろう。ひどく複雑な表情をしている。
「ああ……まあな」
「そっか……はぁ。なんであんたみたいなモヤシの所に理央ちゃんが住んでるのよ。おまけにアンタはお見舞いに来るなって言ってくるし。意味不明よ」
「……うっせーな。こっちにも色々事情があんだよ」

二人お空気はとてもギスギスしていた。
元々　理央が休み始めてから楽がイライラしていたことで二人の間に不穏な空気が流れていたのだが、先日のある口論でとうとう話すらしなくなったのだ。

あの日、理央が倒れた時。真っ先に理央に駆け寄ったのは千棘だった。
急に倒れた理央を心配した彼女が目撃したのは、目を閉じていながら額にびっしりと玉の汗を浮かべ　左腕を苦悶の表情で押さえている理央の姿だった。
押さえているジャージの左袖からは赤いシミが少しずつ広がっていく。その様子を見慣れている千棘はすぐに意味を理解した。
だがそれを見て呆然としてした彼女が正気に戻るより先に、千棘に続いて駆け寄ってきた楽が理央の様子を見てすぐに対処に移った。
救急車を呼ぶと嘘をついてスマホを取り出した彼は　体育教師に断りを入れてから組に連絡。すぐに偽装された救急車でやってきた組員が理央を回収していった。
翌日は理央が貧血と熱中症で倒れたと学校側に連絡が入り、今は家で安静にしているということでこの件は収束してしまった。
クラスメイトや教師はひとまずそれで安心したのか、理央を心配しながら普段の学校生活に戻ったのだが千棘は違った。

お見舞いに行くから楽に理央の自宅を尋ねれば、彼はそれを拒否したのだ。
「なんでよ！　友達のお見舞いに行くのに何でアンタの許可がいるわけ!?」
「あいつは俺ん家に住んでいるからだ。しかも理央は今、絶対安静。お前に会わせるわけにはいかねえ」
楽の言い分は千棘を騙すための方便だが、決して意地悪で言っているわけでは無かった。ただ自分はともかく、千棘に理央がヤクザであることを今の状態で教えたくなかった楽の心が、彼女のお願いを断ったのだ。
しかし千棘はそれに納得がいかず、楽に詰め寄った。
「貧血と熱中症？　ふざけないでよ……私は見たのよ！　理央ちゃんが腕から血を流してたのを！　痛みを我慢した様子であんたに腕の傷がバレないようにしてたの、私は知ってるんだから！　アンタ、何を隠してるの!?」
「うるせー！　オレだって今後悔してるところなんだよ！」
そこからはいつものように口喧嘩に発展して、いつものように最後は千棘の暴力でうやむやになってしまう。
ただ喧嘩しようとも千棘は理央の事については楽に一応の一定な信頼があった為、そこまで強くは聞かなかった。
だが二人はある出来事をきっかけに明確な亀裂が走った。

その日、今にも雨が降りだしそうな程天気が悪い日の事だ。
放課後、いつものように千棘が楽のペンダントを探す手伝いに行こうとしたところで、二人の女子のクラスメイトに声を掛けられたのだ。
「ねぇねぇ、桐崎さんって一条君と付き合ってるの？」
「……hぁ!?　ないない絶対ない！　なんで私がよりにもよってあんなモヤシと!?」
そう千棘が否定すれば、二人の生徒はとても安心した様子を見せたのだ。
なんでも放課後、千棘と楽が二人で一緒にいるのをよく見かけた女子たちがそう勘違いしてしまったらしい。だがそれも千棘の言葉を聞いて違うとわかり、満足したのだとか。
「それが聞けてよかったよ。だって、もし二人が付き合ってたら、理央くんが可哀そうなんだもん」
「ね。理央くんがいない間に二人が急接近とか、ほんとシャレにならないもんね」
「へ？　なんで理央ちゃんが可哀そうなの？」
二人の誤解を解けたことにひとまず一安心した千棘であったが、何故か理央の話題が出てきたことで興味と不安が加速し　二人に尋ねてしまう。
すると、千棘からは予想だにしない言葉が二人から飛び出た。

「だって理央くん。一条君のことがずっと前から好きなんだよ？　しかも片思い」
「それなのに突然自分がいない所で好きな人が付き合ったとか、ショックすぎるよ」
「……えええええ!?!!　嘘!?」
あまりの衝撃的すぎる事実に千棘は驚愕した。
別に男が男に好意を寄せている、という点に彼女は驚いたわけでは無い。なぜなら千棘もまた理央が女であると思っているから。
ただ自分の友達に好きな人がいるという事実と　その相手がモヤシモヤシと侮辱している楽であるとは思わなかったからだ。
ただそれをどう勘違いしたのか、二人は懇切丁寧に説明し始めた。
「桐崎さんも知ってるよね？　理央くんって男子の制服着てるけど、ホントは女の子なんだってこと。実はあれって意味があってね？」
「なんでも一条君の家が良いところの家らしくてさぁ。それで理央くんの家は一条君のボディーガードの娘らしくて、彼女の家訓で男装して一条君を警護してるんだって」
「そ、そうなんだ。なるほど、だから……でもなんでその事とモヤ…一条君が好きって事に繋がるの？」
話ながら自分の知らない理央の情報を脳内ノートに埋めていく千棘。
話を聞いている限りで彼女も何となく怪我の理由と　理央と楽の関係性にある程度

納得してきた。
　ただ、そうなってくると乙女の心を持つ千棘は、ラブロマンスの予感がビンビンに反応してしまう。
　理央に悪いと思いながら出歯亀根性丸出しで聞いてしまった。
「だって、一条君の警護って男の子がやるものなんだよ？　本当ならやらなくてもいいのに、一条君のために男装までしてやってるし」
「しかも理央くんってさ。一条君の事になると警護とか関係なく、自分を省みないで何かしようするからさぁ……多分クラスの皆全員が知ってる暗黙の了解みたいなものだよ」
「ね。まあそこが理央くんの魅力でもあるんだけどねぇー。」

　二人といつ会話が終わっていたのか、千棘はあまり覚えていなかった。だが気付いたら彼女は走り出していて、今もペンダント探しを行っている楽の下に向かっていた。

千棘が楽の下に辿り着けば、彼女は力強い足取りで楽へと近付き声を上げた。
「モヤシ！」
「やっときたか。おせーよ桐崎。早く手伝って…」
「アンタいつまでこんな事してんのよ！」
楽に詰め寄った彼女はその顔に怒気を浮かばせて楽の襟首を掴んだ。
目の前に迫る彼女の顔がいつもの怒色に染まっている事に対して、身に覚えの無い楽は困惑した様子で彼女の顔を見た。
「……ったく、いきなりなんだよ！」
「色々アンタに言わないと気がすまないのよ！　私達が付き合ってるとか勘違いされるのもあるけど！　その前に理央ちゃんよ！」
「……は、はぁ？　俺と桐崎が付き合ってる!?　つーかなんで理央も出てくるんだよ……！」
捲し立てるような千棘の言葉に付いていけず目を白黒させる楽だったが、彼女はそんな楽に構わず疑問を投げつけた。
「アンタは知ってんの？　理央ちゃんがアンタをどう思ってるのか。どうして男子の制服を着ているのか。モヤシは知ってんの？」
「……どういう意味だ？　だいたい　何でお前がその事を知ってるのか知らねーけ

ど、桐崎には関係無いことだろ」
　楽は彼女の言葉が全くわからない様子で戸惑うことしかできない。
　彼にとってみれば、理央の事情など幼い頃から嫌と言うほど知っているのだ。
『楽を護るのなら男装しなくてはならない。』そう理央に告げたのは親である竜で、それを受け入れたから理央は楽の側近をしている。
　そんな当たり前の事を今更千棘にどうこう言われる筋合いは無い。そう伝えるつもりで言った言葉に、千棘は何を思ったのかスッと身を引いて楽から離れた。
「……そう。アンタは知らないのね。まあいいわ。私はもうこんなことやめるから」
「おまっ。まてまてまて！　なんなんだよ　さっきからいきなり！　お前のせいでこんな事になってんだから最後まで付き合えよ！」
　今度は先程と比べて雰囲気が冷たくなるような様子の千棘が　突然ペンダント探しを止めると聞いて、それに楽が黙っている筈もなく。
　少しの怒りと焦りが彼女を引き留めようとするのだが、次の千棘の言葉に楽は平静を失ってしまった。
「もう一週間も探してるのよ？　いい加減諦めなさいよ。だいたい何よ、大の男がペンダント無くしたくらいでギャーギャー騒いでさあ？」
「ああ!?」

「どーせ昔好きだった女の子に貰った物とかなんじゃないの？　あーやだやだ、昔の事ズルズル引きずって女々しいったら無いわ」
「ッッ!?!!」
それは楽にとって安直に触れてはいけない話だ。
今の彼が向ける恋心と、曖昧であれ昔の約束を忘れられない想い。
その葛藤は従者である理央すら話題に出さない話。
どんどん余裕が失っていく楽に気付かないまま千棘は楽の心を無意識に踏みつけていく。
「どうせ渡した相手もアンタの事なんか忘れてるわよ。こんなんじゃ理央ちゃんが可哀想。なんでこんなモヤシなんかに理央ちゃんが――――――」
「うるせぇ!!!」
とうとう我慢の限界を迎えた楽が拳を強く握りしめて怒鳴るように叫んだ。
「……」
その剣幕に千棘は口を閉じて　ただ黙ったまま楽を見つめる。
静まり返る二人の間に、ポツリと水滴が落ちた。それが引き金となったのか、曇天の空から雨が降り始める。
ザーザーと鳴り響く地面を見下ろしていた楽は絞り出すように千棘に告げた。

「だったらもう、お前に手伝って貰わなくていい……さっさと俺の前から消えてくれ」
「……そう。ならそうさせてもらうわ、根暗モヤシ」
そう言って千棘は雨が降り注ぐ中、楽に背を向けてその場から去っていった。
彼女がいなくなった道の端っこで、楽は独り悔しそうに呟く。
「わかってんだよ……でも、仕方ないだろ。理央が約束を何年も護っているのに、男の俺が他の約束を護らないなんて……そんなの、もっとダセーじゃねーか……」
その声は　未だ強くなり続ける雨の音によって誰にも聴こえること無く　消えてしまった

そして事態は悪化する

「理央ちゃぁぁん!!」
「ふわっ!?」
一週間ぶりのクラスに辿り着いた直後、教室の入り口でダイナミックに迫る千棘さんの姿にビックリさせられました。
相変わらず天真爛漫な様子で安心させられるこの子の魅力。近付かれてわかる女の子特有の彼女のいい香り。頬に触れる柔らかい感触……
「ふぁいアウトです！　」
「会いたかったよぉ！」
「ちとひぇさん！　胸が！　不味いふぁら！」
私の頭を抱えて自分の胸に引き寄せた千棘さんは、私の抗議を聞いているのかいないのかギューッと抱き締めてきます。
役得です。とても、とても役得なのですが、これは不味いです。と、友達なのに……けしからん柔らかい感触のせいでッ。けしからん欲望が私の中で溢れてしまうッ。
くそッ。これが母性と言うものか！　変な性癖に目覚めてしまいそうです！

「これがバブ」
「いい加減離れろっての桐崎」
若の腕が私と千棘さんの身体を強引に離しました。
人肌特有の温もりが離れるのと共に、教室の空気が私の火照った顔を冷ましてくれます。
……ヤバい。多分今の私は顔が真っ赤です。いつもの明るい彼女のせいで忘れてたけど、あれほど密着されれば男の中の男である私とて意識してしまいます。というか、刺激が強すぎるッ。
しかも若に遮って貰わなければ、私は変なことを口走っていた気がします。なんだバ……って。落ち着け私。怪我したのは腕であって頭ではない。冷静になるんだ。
「ッ……何すんのよモヤシ。私の邪魔しないでくれる？」
「理央はまだ病み上がりなんだ。お前みたいなゴリラ女があのまま理央に抱きついてたら怪我しちまうだろーが」
考え込んでいた私は二人の会話に不穏を感じて強制的に現実に戻されました。
と言うか……え？　なんか以前より雰囲気悪くなってませんか？　前までは夫婦喧嘩みたいな感じだったのに、今はまるで……

「あの……二人ともどうしたんですか？　なんか雰囲気が……」
「なんでもねぇ」
「そうそう。それより理央ちゃん」
まるで冷戦状態の離婚寸前夫婦のようじゃ無いですか。

それから一日を通して二人は隣の席だと言うのに会話らしい会話をしませんでした。
言葉を交えることはあっても、それは私が関係していることだけ。
お互い絶対に関わろうとしない二人の様子は見ていて悲しみを覚えます。
本当は口に出して尋ねたい。それで二人の仲を元の通りに戻してあげたい。
そう思うのは私のエゴなのでしょうか。

帰り際に、千棘さんが若の無くしたペンダントを見付けて若にぶん投げたと言う出来事もあったのですが、それでも二人の仲は全く良くなりませんでした。
「若……せっかく見付けてくれた大切なペンダントなんですよ？　今度千棘さんにお礼くらい……」
「……ああ、そうだな。でも俺が桐崎に何かするより理央がした方が喜ぶんじゃないか？　それに俺がアイツに何かしても気分悪くするだけだろ」

帰宅途中に、若にそれとなく千棘さんとの仲を取り持とうと話を持っていっても取り付く島も与えられませんでした。

何故、このような状態になっているのでしょうか……今まではお互い認められなくても、自分の主張を言い合えるような関係だったのに。

私は二人の良いところを知っています。だからこそ、今の二人の関係が悲しくて仕方ないです。

とくに若は幼い頃から良く知っていますから、尚更です。

口調は、ヤクザの息子と言う肩書きのせいか荒々しいですが、それでも人には優しいんです。

物事をよく考えて選択する人ですし……少し……いや、かなり優柔不断なところもありますが……

運動神経だって人並み以上に無くて、ヤクザの家系なのに喧嘩も強くありませんが、それは彼が人に暴力を振るいたく無い心の現れだと……思って……いや、普通に運動音痴なだけ

「おい理央。お前なんか変なこと考えてねーか？」

「……へ？　あ、いや、そんな事ありませんよ！　どうしたんですかいきなり？」

「いや、なんか理央から邪っていうか……屈辱的な考え方をされてる感じがしたから」

「そ、そんな事あるわけ無いじゃないですか若！　私はいつでも若の味方ですよ！　ええ！」

私が声を大にして主張すると、若は納得いかなそうにしながらも私の言うことを信じて頷いてくれました。

危なかった……。若はたまに良くわからないところで察しが良いので困ります。普段は鈍感のくせに……この察しの良さを恋愛に活かせれば今ごろは小咲さんともくっついてただろうに……おいたわしや。

「んー……誰か俺の陰口でも噂してんのかな？　妙な感じが」

「若！　見てくださいアレ！　ウチの屋敷の裏手に黒塗りの外車が！　何でしょうかねアレ！」

これ以上察しの良すぎる若の注意を逸らすために、私は屋敷の前で止まっている車を指差して叫びました。

誰か組の人が買ってきたのか。だとしたらその人物は相当若い新人だろう。ただでさえビーハイブのマフィア達と戦争中なのに、外車なんて買ってきた日には……。

若もそう思ったのか、珍しいものを見るような目でその外車に視線を移しました。

「ホントだ。なんで外車が？」

疑問に思いながら私達は表の門から敷地内に入り、いつもの出迎えを受けます。

そのまま屋敷に入ると、組長が私達を待っていたかのように私達に声を掛けてきました。

「おお帰ったか二人とも。ちょいと後で大事（でぃじ）な話があるんだ。悪いが俺の部屋にこの後来てもらえねぇか？」

「組長？　それって私もですか？」

「おうよ。あー……理央は一応、着替えてきてくれねーか？　ほら、いつもの普段着でよ」

「え？　は、はぁ……わかりましたけど」

そう言うと組長は私達から去っていき、組長が待つ私室へと入っていきました。

疑問に残る会話に私と若は首を傾げることしか出来ませんでしたが、命令されたのでは仕方ありません。組長を待たせるわけにはいかないと、若に離れることを告げて自分の部屋に戻ります。

クローゼットの中にある普段着……正直普段着と言うにはあまりにもカッチリした着物で全然寛げない服なのですが、それを身に付けていきます。

何故これが普段着なのかと言うと、組長から屋敷の中くらいはその格好でいろと言われたからです。

多分組長は普段からしっかりした服装を心掛けて身を引き締めろと言いたいので

しょう。私が若頭の息子だからこそ、その立場に甘えるなと。
男性の私にあえて女性物の着物を選んだのだから、つまりそう言うことなんだと。
慣れた手つきで帯までしっかり着付け、私は組長の部屋に向かいます。
……屋敷だから良いですが、こんな格好を学校の人に見られたら羞恥物ですね。
多分ショックで暫く引き篭るでしょう。
そんなあり得ないことを考えながら組長の私室まで辿り着いた私は入室の許可をとって部屋に入ります。
部屋の中には既に組長と若の姿があり、何やら話をしていました。
「おう来たか理央。実はお前には楽の婚約の協力をしてほしくてな」
「……へ？」
入って早々、組長の発言に私は思考が止まりました。
コンヤク……婚約？　はて……献立の聞き間違いだろうか。
「すみません組長……もう一度言って貰えませんか？」
「だからよぉ。ビーハイブの所のお嬢ちゃんと楽が付き合うことになったから、その手伝いをして欲しいんだ」
……ああ。なるほど。
私はビーハイブと言う単語に、この会話の真意をようやく理解しました。

「つまりこの戦争を止めるために若を使うんですね？　二代目と言う立場を糧に」
「良くわかってんじゃねーか理央。そう言うことだ。お前は他の若ぇモンと違って冷静でいてくれっから助かるぜ」
　頷く組長に私は当然だと返しました。
　なにせ現在のビーハイブとの抗争は拮抗しているのです。このままでは集英組が危ない……そう思っていたからこそ、私はいつか組長に打開策を考えて貰おうと考えていたのですから。
　ただ……私はチラリと若を盗み見ます。
　その顔は納得いかないことを仕方なく受けようとする苦い顔の若でした。
　婚約と言うのは組の人達を偽るための嘘で、多分偽りの関係を築くのだと予想が付きます。だけど若は小咲さんと言う好きな人がいる。だからこそ、そんな偽りの関係を作りたく無いのでしょう。
　私は何も若に声を掛けずに若から視線を外しました。それが最善だと私も思ったから。彼に掛ける言葉が見付からなかったから。
　……まあさっさと告らなかった若の自業自得とも言えますがね。私、その辺はシビアに考えているので。さっさとくっ付けよこの野郎って、るりさんと言ってましたし。

「つー訳でだ楽。これからお前のふぃあんせになる嬢ちゃんを呼ぶから覚悟決めろよ。おーいもういいぞ」

「えっ！　もういんのかよ!?」

組長の言葉に、襖で遮られていた奥の部屋から反応する気配が伝わって来ます。

ずっと誰かいるとは思っていましたけど、私もまさか若のお相手が隣の部屋で待機しているとは思いませんでした。

隣の部屋から確かに男性と話す若い女性の声が聴こえてきます。

『ちょっパパ!?　私、まだ了承なんてしてないんだけど!?』

『でもお相手の彼、結構なイケメンらしいよ?』

『うっ……で、でもぉ……』

ええ……良く聞いたことのある声です。学校で何度も聞いたような親しみのある声。

ああ……

「楽、おめぇのふぃあんせになる千棘嬢ちゃんだ！」

現れたのは、よく知る凡矢理高校の制服を身に纏った親友の千棘さんだった。

お付き合い成立

千棘さんを見た若は、この世の終わりのような表情をしていました。
「パパ！」
千棘さんは私達を見てすぐに振り返ると、彼女の父親らしい白人の男性に縋り付いていました。
「どっち!?」
「ん？」
「だからどっちって聞いてるの！　何で理央ちゃんと馬鹿モヤシがここにいるのだとか、色々疑問がありすぎるけど！　一番聞かないといけないのはそこよ！」
すごい剣幕です。なんと言うか、現実を受け入れることが出来ない悲壮感が千棘さんから漂って来るようです。
……申し訳ない千棘さん。私じゃないんです。これが私だったら、自分も役得だったんですが……
「何言ってるんだい千棘。そんなの彼以外にいるわけ無いじゃないか」
そう言って若を見る白人の男性……多分ビーハイブのボスでしょう。

彼は駄々っ子を落ち着かせるような父親の表情で千棘さんを宥めています。
「ま……待ってくれ親父。まさか……マジで桐崎なのか？」
「なんだ。もう面識があったのか？」
「同じ学校に転入したからね」
此方もプレゼントを与えられる機会を失った子供のような表情で絶望する若がいました。
そんな様子にも気づかず、千棘さんのお父様と組長は仲の良さそうな会話を繰り広げています。
「紹介するぜ楽、理央。こっちがギャング〝ビーハイブ〟のボス、アーデルト・桐崎・ウォグナーと……桐崎千棘お嬢ちゃんだ」
「お父上からは詳しく聞いているよ楽くん、理央ちゃん。よろしくね」
「よろしくお願いします、アーデルトさん」
これが組織の頭としての貫禄なのでしょうか。そう自分の子供が凄く嫌そうな表情をしているのに自分達のペースで進める二人。
そのペースに合わせては不味いと思ったのか、若と千棘さんは慌てて二人の会話に話を捻り込んでいきます。
「ムリムリムリムリ！　こいつと恋人役なんて絶対無理!!」

「パパは知らないのよ！　私達が学校ですっごく仲悪いんだから!!　だいたいなんでこんなモヤシ男と!?」
「んだとコラ!!　親父！　こんな奴と上手くいくわけねえって!!」
そこから何時ものように始まる夫婦喧嘩のようなやり取り。
私、すごく蚊帳の外なのですが……まあ、いつもの二人に戻ったので良しとしましょう。うん。
ただ、何とも言えないカオスな空間が出来上がっています。
二人のボスは自分の子供達恋人役をやらせたいようですが、当の本人達がすっごく拒否しているのには代わりありませんからね。
私は巻き込まれるのが面倒なので暫く空気と化していましょうか……なんて考えながら部屋の空気さん達とお友達になっていたのですが……どうやらそうはいかなくなりました。
「理央ちゃん！　理央ちゃんはいいの!?」
カオスと化していた空気がピシリと凍りついた気がします。いや、私は何故そうなったのかわからないのですが、若と組長の間の空気が凍った気がしたんです。
「？　どうしたんだい我が友よ」
「……あ？　ああ、いや……なんでもねぇ」

「？」

煮え切らない組長の態度にビーハイブの頭目さん……アーデルトさんが不思議そうにしていました。

正直私も同じ気持ちなのですが、その前に千棘さんの質問に答えねばなりません。

「千棘さん。私は集英組の一員……組長の部下です。その私が組長の考えを否定する筈がありません」

集英組の平組員の私が意見なんてそれこそ恐れ多いです。組に忠誠を誓っている私としては、自信を持ってこの作戦に同意するつもりですよ組長！

そんな気持ちでこの場にいる皆さんに聞こえるように宣言したのですが……何故でしょう。余計に空気が悪くなった気がします。

千棘さんは今にも泣き出しそうな顔で見てきますし、若もなんか苦虫を噛み潰したような表情ですし。

特に組長なんてメチャクチャ申し訳なさそうに私を見詰めています。

え？　私何か不味い発言しちゃいましたか？　組長、その顔はどういう意味ですか？

破門ですか？　その哀れみの視線は私に対して破門する同情の視線なんですか!?

私が脳内でパニックに陥っていると、組長が決意を固めたような表情で若に向き直っています。

その顔凄く怖いんですけど……私大丈夫なんですか？
「そう言うこった、楽。理央も組のために決意を決めてるんだ。男のおめぇが覚悟決めねぇでどーする」
「親父。でも俺は……」
若が躊躇っているような雰囲気で口を開き始めたところで、私と組長、そしてアーデルトさんがとある音と気配に気付きました。
音はＲＰＧの発射音。気配はロケットが私達のいる屋敷に向かってきている事。
次の瞬間、屋敷を貫く爆発音と共に爆風が部屋の中をかき回しました。

ガラガラと音を立てて棚やら装飾品やらが崩れ落ちていき、元の原型がわからないほどにメチャクチャになった部屋。
それどころか部屋をぶち抜いた大きな穴が、廊下や隣の部屋まで貫通しています。
「な、なんなんだよ……」
若が呆然とした様子で驚きの声を呟いた直後。
この部屋から敷地内の外まで空けられた風穴。その穴から何十人と言うマフィアの格好をした男達が、私達の部屋に向かってきているのが見えます。
そいつ等は私にとってもよく見知った男達。特に先頭に立つあの男を見た私は、袖口

から愛用の得物である二本の刀を抜き放ち、私はその無法者共から皆を護るように前に出て臨戦態勢を整えます。

そう。私達の屋敷を滅茶苦茶にして現れたのは、何度も私達と抗争を続けてきた腐れマフィア共……ビーハイブの連中でした。

「見つけましたよお嬢……集英組のクソ共がお嬢を拐ったと言うのは本当だったようですね」

「ク……クロード?!!」

そして先頭にいるのが憎きメガネの化物・ビーハイブ大幹部のクロードという男。

しかも私達に在りもしない濡れ衣を掛けながら”出入”する始末。叩き割ってやりましょうかあの眼鏡。

というか屋敷壊されたのもそうですが、我が物顔で他人の敷地に侵入してくるのも腹立つんですけど? ねえアーデルトさん、お宅の部下共は常識も知らないんですか?

「ご安心下さいお嬢。お嬢を守るのがビーハイブ幹部としての私の役目……不肖 このクロードめがお迎えに上がりました」

「いや、私別に拐われて無いんですけど!」

それはそうとあの男は千棘さんだけに意識を向けていて、彼のボスでもあるアーデル

トさんには気付いていないようなんですが……いいんでしょうか？
組織のボスに気付かないとか、正直私としては理解できないんですけど。怠慢すぎじゃありませんかね？（ドスドス）
するとちょうどその時にバタバタと足音を立てる集団の気配が。
ビーハイブの者達が現れた場所とは反対の襖の扉から集英組の皆が完全武装で現れました。当然そこには父上もいます。
そこからはやはり毎日殺し合いをする仲であって、罵詈雑言を飛ばすわ、殺気立つわ……。今すぐ全面戦争が始まりそうな勢いです。
当然この場にはそれを望んでいない二つのボスが、若と千棘さんを使って待ったを掛けるのですが……二人に仲良くするなんて無理ですね。わかってました。
お互いの悪口を告げた若と千棘さん。直後、どちらか一方を大切に思っている父上とクロードさんが己の得物を構えました。
「まあまあ、お二人様。若と千棘さんは恥ずかしがっているだけですよ」
「理央!?」
「む……貴様は」
今にもどちらかが凶器を振るいそうになるのを、私は若と千棘さんの前に割って入って牽制しました。

私の姿を見た父上はすぐに得物である刀を下げますが、クロードさんはむしろ私に銃口を向けて殺気立ちます。

相変わらず暴力的なまでの殺気。私の肌が粟立つ感覚と、腕を穿たれた光景がフラッシュバックして傷口が疼く感覚。

ぶっちゃけヤバいです。変な汗が背中に溜まっている気がします。今すぐあの眼鏡を叩き割って逃げ出したい。

それらを気力で押さえ付けながら私は彼にゆっくりと語りかけます。

「二人は付き合っていると言っているのは私の組長と、貴方のボスですよ？　その部下である私達が上の方の意見に口を出すなど……ビーハイブとやらはどうも組織として足りないと言うか……呆れて物も言えません」

「貴様ぁ！　ボスの威厳が足りていない等と、私だけでなくボスまで侮辱するか！」

別に私は不誠実な貴方を馬鹿にしただけで、アーデルトさんを貶したつもりは無いんですが。

ちなみに父上。何故悲しそうな顔をしているのかわかりませんが、私は騙されませんからね。身体が僅かに反応していたのを私は見逃していませんよ。そんな「理央、お前……」みたいな表情がすごく気になりますが、私は騙されませんよ!!

「さて、若と千棘さん。当主二人は貴方達が付き合っていると仰ってますが……事実で

すね？」
話が進まないので後ろの二人に振り返ってそう尋ねます。
その時に目尻を下げてニッコリ笑って、このままだとマジでお二人の命がヤバイですがいいんですか？と目線で尋ねるのも忘れません。

その後、実に良い声でお二人のお付き合いしてます宣言が荒れた部屋の中に響き渡りったのは良い思い出です。
あ、アーデルトさんには部屋の弁償をお願いしました。貴方の部下が壊したんですからそこは上司であるアーデルトさんにきっちり支払って貰いましたよ。
良い笑顔で撤収するビーハイブの面々を見ていたので、きっと今日の私は気分良く眠りに付けると思いますね。

親子喧嘩

若と千棘さんが偽りのお付き合いを始めた夜の事です。

二人のお陰でここ最近忙しかった組の皆はビーハイブとの抗争に出向くことも無くなり、落ち着いた日常が戻ってきました。

皆ビーハイブを排除するとか言いながらも、なんだかんだ本心では戦争を望んではいなかった筈です。

その為か、今までは只でさえ厳つい表情の組の者達が子供も泣き叫ぶ状態であったのに、今では馬鹿共に壊された屋敷を治す傍ら、ご近所さんに笑顔で挨拶をする余裕があるくらいです。

かく言う私も肩の荷が降りたというか。若頭の息子と言う期待を背負っていた為に、不甲斐ない結果を残さないよう常に張り詰めていたから……

まあ、それは良いんです。それより、今は若と千棘さんの件が大事です。

この事情を知っているのは組長と若、そして私だけ。混乱を招かないよう最低限の人数しか知らせてはいけない情報となっていますが、それでも秘密を知っているのが当事

者二人と私だけと言うのは心もとないです。
私は今組長の元に私の父にも情報を共有させるべきだと提案しに行くところでした。
私の父はこの集英組の若頭。であれば最重要機密も知っているべきです。
そう考えた私は組長の部屋までやって来て、直談判しようと覚悟を決めた時でした。
「何故ですか組長(オヤジ)!?　何故坊っちゃんがあんな……しかもビーハイブの野郎の嬢ちゃんと付き合っているのを認めるんですかい!?」
組長の部屋から私のよく知る父の声が聞こえてきたのです。
突然の父の怒鳴り声に、私は開けようとしていた襖から手を外してしまいました。
とは言えそれは驚いたから手を放したわけではなく、組長が父に二人の事とビーハイブの件を報告するのだと考えたから手を放したのです。
だから、安心した私が組長の部屋から離れようとしたときに部屋の中から聞こえた父の声に思わず思考が停止してしまったんです。
「今までの……今までの理央の頑張りは！　理央の想いを無視するって言うんですかい!?」

……は？

今、父は何と言いました？

「組長（オヤジ）もわかってるんでしょう!?　アイツが何のために今まで男装までしてこの組のために尽くしてきたのか!!　全て坊っちゃんと結ばれるために頑張ってやって来たってのに!!　それをぽっと出の……ビーハイブの娘を坊っちゃんに……認められるわけねーでしょうが!!!」

え……何言ってんだこの馬鹿親父。

おっと、口が悪くなってしまいました。いや、違う違う、今はそんな事言ってられません。

えっと……なんだ？　つまりは……父の言葉を吟味するなら、私は若に好きだと言う想いを懐いていて、若と将来を誓い合う為に今まで組の為に尽くしてきたと。私が若と結婚するんだと……

……

……

……

……

オロオロオロロロロロロロロロロ!!!
オェッ!!　ぶゥエエエエ!!　オボロャァァァァァ!!　き、気持ちわる……
ゲェェェェ!!

考えただけで吐き気が!!　何てこと言いやがるんですかあのクソオヤジ！
あ、やべ。厠、マジ厠。吐くって、本当に吐くって!!
なに想像させやがるんですか気色悪い!!　私が若のことが好き?　あり得るわけ無いでしょうが私はホモか!!
マジか。私って父上に今までそんな事思われてたの?ずっと若が好きとか思われてたの?　オェッ……
いや、確かに私は未だに組長と若以外の組全員から女だと思われてるけどですよ。そ

れは無いってマジ全力拒否不可避だから。ガチ否定の深みだから。
　こんなん他の組の人達にも、しかも組長に勘違いされたら私この組で生きていけないから！
「ちょっと待ってください馬鹿父上!!」
「り、理央!?　どうしてここに！」
　私は許可も貰わずに部屋の襖を思いっきり開けて中に侵入しました。
　当然いきなり現れた私に父上や組長は驚いていましたがそれ処ではありません。即刻今の父上の言葉を撤回しなくては!!
「父上！　私は別に若に特別な想いを懐いているから組の為に頑張って来たわけではありません！　変な誤解しないでください！　それと私は女ではなくーーー」
「理央！　お前はいつだってそう自分を押し隠すから駄目なんだ！　お前は毎日組の為に頑張ってるって言うのに！　もしお前の言葉が無きゃ今頃儂ぁお前の腕を撃ったあのクソ眼鏡共々叩ッ切ってるところだ!!」
「いや、そこは切ってくださいよホント」
「お前は昔から我儘を言わんかった！　命令された事を何でも受け入れる……そこはお前の美点だが少しくらい背いてもいいんだぞ？」
「ああもう！　だからですね。私はーーー」

そこから始まるのは私とこの馬鹿親父の言い争いです。
こうなると父上は私の言うことを全く聞かないから堪ったものではありません。質が悪いのは、私がここで引けば父上は勝手に自分の主張で結論付けてしまうから、私はどうしても引き下がれなくなりこのような平行線になってしまうのです。
よって、いつも私と父上の両方を諌めることが出来る組長しか止めることはできません。
「まてまて二人共。オメェ等熱くなりすぎだってんだ」
「ですがオヤジぃ！」
「竜、てめぇ情けねぇと思わねーのか。まだ俺等の半分も生きてねー理央が覚悟決めてんだ。それに楽が千棘嬢ちゃんと付き合うのもアイツが決めたことで、俺等はそれを邪魔しちゃいけねぇ」
「クッ……」
……流石組長です。あの頭に血が登っていた父上をいとも簡単に説得させてしまいました。殆ど組長が仕組んだ事案なので私としては首を傾げたくなる言葉でしたが、丸く収まるのであれば越したことはありません。
あれ？　でもなにか大事なことを忘れてるような。
「……儂ぁ認めませんぜ。こればっかりは坊っちゃんの味方になれねぇ」

「おうよ。ま、歳食った俺等が今更若ぇ者の恋路をどうこうするのは良くねぇことだがな。竜、お前もこれを気に少しは大人になんな」

ん？　ヤバい、考えごとしてたら二人の会話を聞き逃していました。なに話してたんです？

あ、父上が出ていってしまいました……

えと……どうなりました？

「つーことだ理央。迷惑掛けるかも知れねーが俺等も努力はする。言いてぇことはあるだろうが、おめぇもまだ病み上がりなんだ。今日はもう寝な」

え、組長？　あ、ちょっ、まっ……。えぇー……閉め出されてしまいましたよ。

と言うか本当に待って！　今更思い出しけど、結局私が若のこと想っているとかふざけた誤解は解けたんですか!?　ねぇ!?　ちょっと!!　ねぇってば!!!

「どーした理央。目の下に隈ができてんぞ」
「……そー言う若も目の下に隈が出来ていますが？」
結果。私はあの後、誤解が解けたのか気になりすぎて夜も寝れませんでした。ツラい。
組の人達全員分の朝食の下拵えをしている若とばったり会ったときも、一瞬距離感を考えてしまうほどには心に来ています。
多分、千棘さんと付き合う事になった若も同じように思い詰めて夕べは寝れなかったのでしょうが、正直気遣ってあげられる余裕がありません。
「「ハァ……」」
思わず溜め息が……って、ん？　若も溜め息ですと？
あれ？　若の溜め息吐いた時って大抵良くないことが……
「坊っちゃん!!」
私が若の隣で水を飲んでいると、突然部屋の扉が勢いよく開けられて一人の組員さんーーーー辰郎さんが入り込んできました。
その勢いとは裏腹に何故か辰郎さんの表情は切羽詰まった様子ではなく、どこか浮か

れているように見えるのは私の思い違いでしょうか。
「坊っちゃん何やってるんでさぁ。今日は大事な日でしょう？　こんなところで油売って無いでオメカシしてこなきゃじゃないですか！」
「大事な日？　なんだそりゃ？」
「今日って何かの記念日でしたっけ？」
　辰郎さんの言葉に若と私は同時に首を捻ります。はて、何かあったでしょうか？
「何言ってんですかい。今日は千棘お嬢ちゃんとの『でぇと』でしょう!?　もうやっこさんこっちに来ていますぜ？」
「は……はぁぁぁぁぁ!?!!」
　直後驚きの声を上げた若は慌てて玄関まで走っていきました。
　あまりの速度に呆気に取られた私でしたが、若が寝間着姿のまま千棘さんを出迎え（真偽を確めるため）に行った事に気づき、私は慌てて若を追いかけることになりました。

私は私の思うままに

「おはよう理央ちゃん！　昨日はゴタゴタしてたから言えなかったけど、理央ちゃんその服とってもかわいいわね！」
「……ありがとうございます」
　午前９時の朝。私は異性の友人に衣服を褒められて、嬉しいのか男として悔しいのかよく分からない複雑な感情に支配される思春期男子特有のめんどくさい嫌な朝を迎えております。
　日本語からしてもうカオスなのですがつまり私の感情がとてつもなく複雑でこんがらがっていると言うことです察してください。
　そんな私の思いとは裏腹に、目の前で私に太陽のごとく輝く笑顔を向ける千棘さん。善意ある言葉の暴力ってこんなにも痛いんですね……
「千棘さんも今日はとてもオシャレですね。その服とても似合ってて魅力的です」
「ありがとー！　やっぱり理央ちゃんはわかってるわね。そこのモヤシっ子と違って」
「悪かったな。女心のわからねーやつで」
　今日は土曜日。つまり高校生にとって絶好のデート日、なのかは知りませんがそうら

しいです。と言うわけであちらのビーハイブさん方がしなくても良いお膳立てを行い、千棘さんと若が仮初めのデートをしなくてはならなくなりました。

若は嫌がってましたが偽のカップルを演じると決めたのだからしなくてはなりません。と言うか千棘さんのような可愛い女の子とデート出来るんだからむしろ羨ましいです。爆発しろ。

私はまだ左手が痛むのでせっかくの休日なのですが屋敷で安静。フリで手を繋ぐ若と千棘さんを憎し全開の笑顔で見送りました。

さ、私は部屋に戻りますか。腕の怪我が治っていないせいで私は登校以外基本的に外出禁止ですからね。

若の護衛はウチの出歯亀根性丸出しな男達に任せましょう。二人の後を追うように尾行していきましたが……まあ無視無視。その中に自分の育て親も混ざってましたので軽蔑の目で見送って、あとは二度寝でもしましょう、うん。

……あ。そう言えば成り行きで若はデートに行きましたが、あの人デート初めてでしたよね？　大丈夫でしょうか？

二人で遊びに行く時は若の好きにさせているので、私は若の本当に高校生かと疑うような好みを知っています。

映画は、まあ可愛いもの作品を見ることが多いので女子と行っても大丈夫でしょうが

……デートで見る恋愛物は若好きじゃないです。
カラオケはアウトですね。あの人、演歌しか歌えません。逆に演歌だけすごく上手いです。でも若い人向けじゃない。
食事は……そもそも外食するなら自分で作るスタイルの若が、オシャレなレストランを知っている筈がありませんが……まあ、カフェとかなら若でも知ってる、か……？
……うん。ここで考えていても無駄ですね。さっさと寝ましょ。

夕方辺りに帰って来た若は酷くご立腹のようでした。
なにやらデート中に若の意中の相手である小野寺小咲さんにばったり会ってしまったそうで。色々誤魔化そうとしていたようですが、若の様子を見るに芳しくなさそうです。
それはそうと、さっきからクラスメイトの方々からのライン通知が止まりません。あれは本当なの？　とか、諦めちゃっていいの？　とか。
あれ、とは若と千棘さんの件のことです。どうやら小咲さん以外にもクラスの知り合いから見られていたようですね。

若、残念ながら二人の関係はクラスの皆に情報共有されてますよ。でも良かったですね。こんなにも女子の方々から気にされるなんて大人気ですよ若。私が知らなかっただけで、若もモテてたんですね。

クラスの皆には、『ほんとですよー』とか、『諦めもなにも私、男なんですが笑笑』等々返信しておきました。最後に『皆さん、あの二人のことを暖かく見守ってあげてください。あの二人程お似合いの関係は無いので。私からのお願いです』と付け加えておきました。

若には悪いと思っていますが、此方も組と私の命が掛かっておりますので二人の関係を否定しません。

決して、千棘さんのような可愛い方と嘘でもお付き合い出来てるのが羨ましいとか嫉妬しているとかじゃありません。断じて。

……ラブコメかよ、チッ

「え？　理央……さん？　なんか今舌打ち……」

「気のせいですよ若。食事中にそんな下品なことするわけ無いじゃないですか」

「あ、はい」

私も、恋をしてみたいです。

ヤクザという物騒なコミュニティに身を置いている時点でそんな事は出来る筈がありませんが、それでも人並みに恋をしてみたいと思うくらいは許して貰いたい。

こんな人間に恋されたところで迷惑でしょうし、仮に私の恋が実ったとしても相手に重荷を背負わせてしまいます。私が好きになった人にそんな重荷を背負わせたくありません。だから、私は恋をしてはいけない。

ああ……それでも思わずにはいられません。特に若と千棘さんの二人の様子を見ていると、なんだか青春しているなって思えて羨ましさが私の心を乱すのです。

私は若に告げていませんが、汚い事も平気でやってきた人間です。ヤクザに身を置いている時点で何を今更と言われても仕方がありませんが、私はいざとなれば人を平気で殺せます。こんな身でありふれた生活が許されるとは思っていません。本来なら学校に通う事すら烏滸がましい存在なのです。

それでも……ああ。やはり私は恋をしてみたい。

どんな風にその人を想うのでしょうか。家族愛とは違うのでしょうか。忠誠心とも、忠義とも違うのでしょう。

若は良く私に小咲さんの話をします。何度も何度も馬鹿みたいに小咲さんの可愛らしさを報告してきます。

若が小咲さんの行動一つ一つに一喜一憂して頬を赤らめる姿は大変気持ち悪いです

が……それはとても楽しそうにしています。
だからそんな若を見ていると、私も恋をしてみたいと思ってしまうのです。
そう思わずにはいられなかったんです。

そんな私は今、恋をしています。
「おひょー!! 眼福ですなー楽くん、理央くん!」
「ええ、三人とも可愛らしいです。目の保養ですね」
照りたく太陽! 弾ける水飛沫! 私は今、美少女の水着姿に猛烈に恋をしていまッす!!

二人のデート日から一週間程。次の日に盛大にクラスの皆から祝われ、クラス公認のカップルとなったあの事件からまあまあ日が経ちました。
若と千棘さんは私生活と学校両方に偽の恋人を演じ続けないといけなくなり、大分苦労しています。

そうして季節も移り変わり、暖かいとは言えまだまだ肌の露出も控え目な5月終わりを迎えたこの時期。

そんな時期にも関わらず、私は一足先に水着姿の美女達を拝むこと出来ています。

「ちょっとアンタ等、変な目で見ないでよね！　特にモヤシ！」

「み、見てねえよ！」

おっと、千棘さんから注意を受けてしまいました。流石に目線が露骨過ぎましたか……

いや、それでもこれは仕方の無い事なんです。何故なら私は今、水着に恋をしているのだから!!（意味不）

学校指定のスク水と言えど、その破壊力はとんでもない。ぴっちりと肌に吸い付く布のお陰で体のラインはいつもよりはっきりと見え、ヒップに食い込む布の位置を直す仕草なんかハァー……。

しかも小咲さんとるりさんはスク水なんですが、千棘さんはまさかのビキニ!!　肌の露出が暴力的なまでに凄まじい。これを見るだけでも、わざわざ放課後に残ってプールに来たかいがあったと思いますね。

ヒョーッ！　生きててよかった！

ちなみに何でまだ五月のこの時期に学校の屋内プールで水着になってるのかと言う

と、千棘さんと小咲さんが今度ある水泳部の大会で助っ人に誘われたからです。ついでに泳げない小咲さんを若と千棘さんで教えると言うことに。何で泳げない小咲さんが助っ人に選ばれたかはるりさんにでも聞いてください。私は3人の水着姿を目に焼き付けるのに忙しいので。

あ、ちなみにですが私と集さんは完璧な野次馬です本当にありがとうございます。

「てか理央は水着に着替えねえーの？」

「実は怪我がまだ治っていないので……しばらく絶対安静です」

「ええー。新鮮だから理央の水着姿見てみたかったんだけどなー。もちろん男用の競泳水ギィッ!?」

「死ね。変態」

あ、集さんがるりさんに殴られてプールにダイブしました。大きな水柱は屋内の天井にまで届き、集さんはプールの底へと沈んで行ってしまいます。流石に目線が露骨過ぎて制裁を加えられましたか。

私もああならないよう気を付けないと。

「佐々木さん気を付けな。あいつ変態だから」

「え？　あ、はい知ってますよ……それにしても、泳がなくても私も水着着れば良かったですかね？　もちろん、男性用のですが」

『絶対駄目!!』

おおう!?　まさか全員から否定されてしまいました。え？　そんなに駄目ですか？　男らしい体躯とは言えませんが、私も腹筋は割れている方なので身体には自信があるのですが……そうですか、駄目ですか。クスン……。

まあいいです、別に。男の裸なんて誰も見たくないでしょうし。それよりも今は千棘さんや小咲などなど、他の女子の水着姿を目に焼き付けましょう。

最近まで腕の怪我のせいで殆ど皆さんと遊べていませんでしたからね。学校が終わったら即帰宅……この間の勉強会すら参加させて貰えませんでした、グスンッ、グスンッ……。

今日も本来なら帰って安静に過ごす予定でしたが……私とて男です。クラスメイトの、それも美少女達が水着姿を晒してくれると言う機会に、腕に穴空けたくらいの怪我で逃す筈がありません。怪我の悪化が怖くてヤクザやってられるかって話です。ヤクザ関係ないけど。

流石に水に入って泳ぐのは辞めましたが。流石に腕への負荷がヤバいので。

ついでに明日の練習試合も見に行けません。若に止められました。自分だけ美少女の水着見ておいて私には見させないとかマジふざけーーーーーいえ、なんでもありません。我儘は駄目ですね。それに今日見ることが出来たのだから儲け物でしょう。

……千棘さんのスク水姿も見たかったよクソッ。

ちなみになんか若が女子更衣室の鍵を盗もうとしていた疑いを掛けられていましたが助けませんでした。はたから見てても犯罪者のそれでしたし、明日の恨みもあります。

ただでさえ千棘さんと言う可愛い女の子と演技ですが付き合っているのに……自分だけいい思いとか私は許しません。

私は明日の若に強い憎しみを想いながら、今日の良き光景を一生思い出に残しておこうと心に誓い眠りに付くのでした。

そんな眼福であった日から数日経った日の事です。

いつものように登校した私達に、担任のキョーコ先生から転校生がまた来たとお達しがあり、私を含めたクラスメイト全員と顔を合わせたその日。

私は運命の人に出会いました。

「初めまして。鵜誠士郎と申します。どうぞよろしく」

こんなにも美しい人間がいるのかと、私は思いました。私と同じぐらいの身長なのに

恐らく私より足の長いスラっとしたモデル体型。細身であるのにそれすら上回る顔の小ささ。加えてキリッとした瞳に整った顔立ち。

異性なら憧れ、同性なら嫉妬すること間違い無しでしょう。

私は図らずも彼ーーーー鵜誠士郎某に嫉妬しているであろうクラスメイトと同じ、強い嫉妬心が芽生えました。

何なのだこのイケメンはと。このイケメンに対する嫉妬心だけで人を殺せるんじゃないかと。男として生涯の敵だと定めたこの転校生が憎くて憎くて仕方がないと。

それを踏まえた上で、嫉妬する男子生徒の心を代弁する形で私がした事は一つだけです。

「ぶーぶー！　イケメン反対!!　イケメン反対!!」

腕を上げ下げして、怒りのシュプレッヒコールを一人で展開するのでした。

襲来。黒虎

私は思うのです。

街角で見かける彼女連れのイケメン。なんてカッコいいんだと。貴方様はさぞ女性にモテていたんでしょうね。しかもとっかえひっかえしたりして彼女に飢えたことなど一度もないんでしょう。

羨ましい。なぜ神は世の中の人間にこの様な差別を生んだのか……。イケメンは何をしても許されると言われていますが、それはイケメンが起こす行動が絵になるから。だから許されるのです。不条理すぎる。なぜイケメンは優遇されるんだ。私だって優遇されたって良いじゃないか。あー彼女欲しい。何で私には彼女いないの？　馬鹿なの？　死ぬの？　とりあえず彼女いる若と関係ないけど集くんは爆発してください。理由は特にありません。それよりもアイツです。あの鶫誠士郎とかいうアイツが千棘さんに邂逅一番に抱き付いたのに何事もなかったかの様に親しげに話したり、それを見たクラスメイトの女子達は皆目を変えてかっこいいだの私もされたいだのけしからん。私が抱き付くぞコラ。いいのか？　私が抱き付いてもその後警察に連絡しないか？　するでしょうねチクショウ！

まあ用は何が言いたいのかというと。
イケメンは全てが許される。そんな世の中は間違っている。

「はんたーい!!　イケメンはんたーい!!　モテない男達にも恋愛の自由を!!」
クラス中に轟くイケメンへの憎悪の声。非モテの怨嗟と溢れ出る狂気が若者達を刺激し、全員が一丸となって天に向けて誰にでも恋愛出来る世の中を願う声が上がる。
一斉に拳を天に突き出し、幾度となく主張をアピールし、相容れないイケメンへの抗議が形となって表れる。

「理央さんや。そんなイケメン反対運動を一人でやっていても誰も賛同しませんぞ」
「馬鹿な!　何故クラスメイトの男子は誰も着いてこない!?　特に集さんは私と『イケメン絶対許さナイジェリア同盟』を組んだ仲間じゃないですか!」
「組んだ覚えねー」
まさかのクラスメイト達と集さんの裏切りに私は絶望します。何故誰も私についてきてくれないのか。皆私の事が嫌いなのでしょうか。
「理央くん今日は元気だねー」

「珍しいよね。あんなに騒いでるの。鶫くんが来てからずっとだよ？　ねぇ、もしかして……」

仲間に裏切られた私が一人虚しく抗議のデモを起こしていると、周りの女子生徒達から注目され、ヒソヒソと何かを囁かれています。恐らく、モテない男の妬みに辟易しているのでしょう。また一つモテない理由が露見した瞬間です。

くそぅ……最近私は全くツイていません。腕を撃ち抜かれるわ、千棘さん達との遊びに参加出来ないわ、貴重な水着姿を一度逃すわ……アレもコレも全てあの男が悪い！

私は自分の運の悪さを転校生のせいにして、未だに千棘さんとイチャイチャしている彼を睨み付けます。

ちなみに彼は千棘さんにカップルならではの『あーん』をしようとしている真っ最中です。今ならこの目力だけで人を殺せそうッ。

「あの、お嬢……何故私はそこの人に涙目で睨まれているのでしょうか……？」

「ホントだ。あんなにほっぺ膨らませてどうしたんだろ……ハッ。もしかして昼休みの私との時間を鶫に独占されて嫉妬してる!?　それなら呼ばなきゃね！　おーい、理央ちゃんも一緒にご飯食べよー！」

人はおろか、ゾウや鯨という言った巨大動物までも殺せるんじゃ無いかと思えるほど

睨みを利かせていると、ふいに千棘さんから私を呼ぶ声と手招きをされました。
既に精神が擦り減り摩耗しきった私に千棘さんからのお昼の誘いはもはや麻薬に等しい。私に抗う力はなく、ふらふらと二人のいる席に足を進める事しか出来ませんでした。
「鶫。この子が私の友達の理央ちゃんよ。この学校に来て最初に仲良くなったの！」
「鶫　誠士郎です。いつもお嬢と仲良くしてくださりありがとうございます」
「……佐々木理央です。千棘さんとは仲良くさせていただいてます」
目の前のイケメンは私の眼力に戸惑いながらも爽やかな自己紹介をしてきました。ぶっちゃけ無視したい気持ちはありましたが、わざわざ紹介の場を設けた千棘さんの顔に泥を塗る様なマネは出来ませんし、何よりそれをしたら完全に私の負けの様な気がして挨拶を返します。
「あの、佐々木様。私、何か気に触るようなことをしたでしょうか……もししていたなら謝ります。申し訳ございません」
挨拶を返したはいいけれども、それ以降睨みながら昼食を取っていると、イケメン野郎……鶫さんから謝罪をされてしまいました。
憎たらしい……憎たらしいぞ鶫誠士郎っ。何故そんなにもお前はいい奴なんだ！

これじゃあ完全に私が悪役じゃないか！　謝ってしゅんとするんじゃないですよッ。イケメンの癖に仕草がなんだか可愛らしいって思っちゃったじゃないですか！　罪悪感をすごく感じちゃったじゃないですか！

フーッ、フーッ……落ち着け佐々木理央。これでは完全に悪役だ。一旦落ち着いて普段の冷静な私に戻るんだ佐々木理央！

「ご、ごめんなさい。今日はなんだか体調が悪くて……そのせいでイライラしてしまって、機嫌が悪いというか……鵜さんが何かしたから睨んでいたわけじゃないんです」

お前の存在自体が私の神経を逆撫でにしてるんですよ。そう言いたい気持ちを押し殺して私は鵜さんに謝り返しました。

嘘は吐いてません。実際、今日は普段より数段増しで気分が悪いです。なんというか、鵜さんを見ていると私の腕に風穴を空けた憎きクロードを思い出して傷が疼くのです。綺麗な姿勢、無駄のない動き、千棘さんをお嬢と呼ぶその姿があの男とダブって見えます。

まあつまり、私の機嫌が悪いのはあの男と鵜さんが原因と言うことですね。

そんな私の想いを知ってか知らずか、体調が悪いと言った私の発言に鵜さんは私の身を案じてくれました。

「だ、大丈夫なんですか？　保健室に行った方が……」
「いえ、今日中には症状も治ると思うので大丈夫です」
私が大丈夫だと言うも、鶫さんも千棘さんも心配そうに私を見ていました。
はて、そこまで私は体調が悪く見えるのでしょうか？　たしかに今日の私はなんだかおかしい気がします。いくらイケメンとは言え、私はここまで会ったことも無い他人を嫌悪するなんておかしいです。
「……すいません。やはり体調が優れないようです。少し外の空気を吸ってきます」
私は二人にそう断りを入れて席から立ち上がり、教室から出ました。一度頭を冷やそうと、この学校の屋上に続く階段の踊り場まで歩きだします。
が……相変わらず腕の傷は疼くばかり。やはり体調が悪いのかもしれません。一度立ち止まって壁にもたれ掛かれば、なんだか身体に怠さを感じて歩く気力すら失せるのです。
壁冷たいなぁー……。
「理央ちゃん、大丈夫？　私もついて行くよ」
そんな気の抜けた考えをしながら私が壁に頭をくっ付けていると、背後から私を呼ぶ声が聞こえてきました。

背後を振り返ればそこには心配いそうな顔を向けてくる千棘さんがいます。あのイケメンである鶫誠士郎とのお昼ご飯より体調の悪い私が優先された事に驚きながら、そんな優しい行動を私にしてくれた千棘さんに申し訳なく思ってしまいました。

「千棘さん……あの、いいんですか？　せっかく鶫さんとお話ししていたのに……」

「いいのよ。あの子とは家が同じだからいつでも話せるし……それに、私も女の子だから理央ちゃんの苦しみもわかるから」

そう言うと千棘さんは私に寄り添い私の身体を支えてくれます。いくら友達とはいえ異性と言う関係なのに、千棘さんはそんな事気にせず身体を密着させてきます。

「えっと、あの、千棘……さん？」

「やっぱりあの日よね……取り敢えず保健室行こっか！　寝てれば楽になるかもしれないし！」

思わぬラッキースケベにドギマギしている間に保健室へと連行されると、私は有無を言わせぬ勢いで千棘さんにベッドに寝かしつけられてしまいました。

これが噂のベッドインか等とおかしなことを考えている間に、意識が段々とフワフワし始めてベッドの感触に身を任せるのでした。

▽▽▽

酷い夢を見た。

私が中学生だった頃、組長に託された事業で私はとあるアメリカのマフィアと交渉の場にいた。事業を任され始めてからまだ半年も経っていなかったペーペーヤクザだった時の話だ。

その日は父上が傍に居らず、しかもその場には英語の会話ができる人間が私しか居なかった。とても重要な話し合いがあるわけではなかったが、お得意様と言う事で失敗は許されない大事なシノギの交渉の場ではあった。

酷く緊張していた。緊張していたのを覚えている。

だから私は失敗してしまった。本来なら気を付けねばならない事を疎かにしてしまった。そのせいで交渉の場は崩壊したのだ。

あの時現れたヒットマン。黒き獣の手によって――――

「……頭痛い」

頭が痛い。恐らく変な時間に起きたからでしょう。ついでにちょっと左手も痛い。

私は周りを見てここが保健室だと気付きました。壁に取り付けられた時計は４時５０分の所で針が止まっていますね……６限が終わって帰りのＨＲすら既に終わっている頃でしょう。私がここで寝たのが昼休みだから……３時間以上寝た事になりますか。通りで頭が痛いわけです。

私はベッドから身体を起こし立ち上がります。特に目眩はしなかったので体調は頭と手の痛み以外は万全だとわかり、着崩れた制服の身嗜み整えて教室に戻ろうとしました。

その時、校庭側の窓から集団が騒ぐ声が聞こえてきました。

運動部の声では無いでしょう。統一された掛け声と言うより、ザワザワと雑多な声だったから。加えて、なんだか聞き覚えのある集団の声が混じっていれば気にならない筈が無いです。

私は閉じられたカーテンを開けて半開きになっていた窓の向こう側を見ました。

そこには、十数人のクラスメイト達と彼等の前でお互いに向き合って対峙する若と鶫誠士郎の姿が。

私は思わず窓を開けて無作法にも窓際を飛び越えて走り出しました。良くないこと

だと分かっていますが、酷い焦燥感が私の背を強く押してくるのです。
あの二人の下へ駆ける。
すると鵜誠士郎が手に持ったコインを宙へ放り投げているのが見えます。何故か私にはその動作が若に危険である事に繋がるとわかりました。
だってそれは、まるで古の決闘の合図のようだったから。
コインは暫く空中を漂うと、地面に落ちていきます。直後、どこに隠していたのか大量の武器を取り出す彼。私も同様に制服の裾から2本の木刀を取り出します。
コインが地面に落ちると共に、彼が銃を構えます。その素早い動きは熟練者の動きです。若がソレを銃と認識するよりも前に彼の指は引き金を引くでしょう。
だからそれよりももっと早くに、私は彼の銃を側面からの一撃で叩き落としてやった。
「なっ!?」
「うおっ……って理央!?」
二人が同様に私の登場に驚きますが、彼は突然の事にも動きを止めなかった。叩き落とした木刀とは反対の得物で彼に一撃を与えようとしましたが、簡単に避けられて遠ざかってしまう。
本来なら間合いを詰めるのがセオリーですが、私は深追いをしませんでした。なにせ

この場には護るべき若がいますから。

彼が間合いを空けて此方の様子を伺っている間に、私は驚いたまま固まる若の前に立ち、庇う様に鶫誠士郎を睨み付けました。

「やはり来ましたか……」

「えっと、あの……佐々木様？」

私の乱入に酷く狼狽えた様子を見せる彼。どうやら彼方は私のことを伝えられていないのでしょう。いえ……伝えられてはいたけれど、護衛対象を放ったらかしにして保健室で寝ている護衛など、対した障害にならないと思っていたのかもしれません。

実際今の今まで寝ていたのだから私は護衛失格でしょう。まさか、ビーハイブの刺客を若の傍に放置するなんて。

「さて……確か、今はビーハイブと集英組で不可侵条約を結んでいる筈。なのに、これは一体どう言う事でしょうか？　鶫誠士郎……いや、『黒虎（ブラックタイガー）』さん」

決闘

『黒虎』。その異名は裏社会において最大級の触れてはならない存在です。かの者が通った跡地は荒野と化し、壊滅させられた組織は数知れず。

ビーハイブ最強のヒットマンが、若を殺しに来たのです。

「なるほどなるほど。やはりビーハイブの大幹部様は戦争を諦めていませんでしたか。何か火種を起こすとは考えていましたが、まさか若の命を直接狙ってくるなんて……はぁ。私としたことが随分と間抜けでした」

「ど、どう言う事ですか……？　何故、佐々木様が……」

「ですが此方も嘗められたものですね。こんな白昼堂々と暗殺を行ってくるとは思ってもいませんでしたよ」

私の登場を予期していなかったのか、プロのヒットマンである筈の彼が動揺している事に少し疑問はありましたが、まずは若の安全確保が先決です。

彼と同様に後ろで驚いたまま硬直している若の襟首を掴み――――なんとなく目に入った小咲さんの方に投げ飛ばします。

「――――へぇ？」

「ぬおおぉぉぉおおのでら、避けッ!!」
若の悲鳴を勝手に合図にして、私は一歩踏み出しました。
「っ!!?」
「チッ……これを見切りますか。流石は黒虎」
一歩目から二歩目の踏み込みへ。その間のみで彼の元に辿り着くと同時に木刀を振るった。
『縮地』と呼ぶ歩法技術。緩やかな動きから一瞬で最高速度へ、かつ落下の加速度を付けたその踏み込みは初見なら殆ど防ぎようがない。だというのにそれを防いだ目の前の男は、やはりあの『黒虎』本人だと言うこと。
彼の得物である2丁拳銃の銃身でしっかりと私の木刀を受け止めている。
「よく、わかりませんが……その身のこなしに、私達の事情を知ってる貴女は集英組と言うことか」
「おや? 私の事は知らされていなかったのですか。なるほど……私など取るに足らない人間だと、そう思われているようですね」
どうやら本当に嘗められていたらしい。腹が立つ。
潜入任務で標的の護衛の情報が当人に渡されていないなど……取るに足らない存

在だと馬鹿にされている以外あり得ないです。
なら、その認識を訂正してもらわねば私の看板が廃るというもの。
「はぁぁ!!!」
「ッ?!!」
ショルダータックルの要領で黒虎の腹目掛けて思いっきり体当たりします。反応されて腕で防がれてしまいますが、衝撃は殺し切れなかった様子。面白いように吹き飛んで――――いや、衝撃を後方に受け流した?
思った以上に吹き飛んだことで私の間合いの外に逃げられてしまいそうになります。軽やかにバク転して空中で体勢を整えている黒虎に、余裕を与えないよう再び大きく踏み込んで斬り掛かります。
「んッ?」
が、刀が彼に直撃するその直前……爆音と共に木刀の腹にかなりの衝撃が奔った事で軌道が逸らされてしまった。
まさかと思い彼の手の中にある拳銃を見れば、私の木刀に銃口を向ける様子がわかった。
「斬撃を見切って弾丸を当てたのですか!?」
「私の拳銃は手足も同然。まあ、貴女の得物が真剣で無かったお陰ですが。それに――

――」

黒虎が更に一歩後に退きながら私に銃口を向けてきます。そのままトリガーに添えられた指が引かれ、弾丸が発射される。

「弾丸をこうも容易く斬られてる方が驚きですよ」

発射された弾丸をタイミング良く木刀で切り捨てれば、呆れた様な声色で黒虎に皮肉を呟かれました。

貴方に言われたくない。こちとら弾丸斬りなどメチャクチャ神経削ってやっているんです。しかもゴム弾だから出来ることであって、実弾でこの距離から射撃されたら普通に間に合わずに終わりです。幾ら目線と銃口から軌道を予測して射線上に木刀を置くことで防いでいるとは言え、実弾なら微調整する隙が無いから無理。

ぶっちゃけ、刃の背が太い木刀だからできたタネのある曲芸です。高速で動く木刀の腹に弾を当てる神業と一緒にしないでください。

ですが、アドバンテージは私の方にあります。幾らかの有名な黒虎でも刀の間合いでは思うようにその力を振るえていない様子。本来であれば彼の間合いはもっと外です。だから今も何とか私の猛攻を迎撃しつつ後ろへと逃げ続けているのでしょう。

「あの黒虎さんが逃げてばかりですか！　とんだ腰抜けですね！」

「挑発には乗りませんよ！」

逃げてばかりでは彼に勝ち目はありません。事実、黒虎を追い込むことに成功しているのですから。彼の後ろは既に校舎が迫っています。このまま後方に下がれば壁にぶつかりますし、左右に逃げようないよう私が牽制しているので横に逃げることは不可能。

ならばと更に追い込む様に二刀の木刀で攻撃に圧を掛ければ、黒虎はこれまでより勢いよく後方へ跳びます。

少しだけ距離が離れた隙に、何やら持っていた拳銃を懐に仕舞い込んで新たな武器を取り出しましたが、構えるよりも前に黒虎は校舎の壁にぶつかりました。

「貰ったッ」

足が止まった彼に反撃を警戒しつつ木刀を振り下ろします。すると彼はその一撃を高く跳躍することで躱しますが――――身動きの取り辛い空中など逃す筈がありません。

そう考えて追撃をしようと木刀を上に振り……

何故か、空振った。

「……はっ？」

思わず呆けた声が出てしまった。

だって……だって、黒虎が空中を浮いている。いや、どんどん空へ登っていくんですから。時折窓の縁を蹴って登っているように見えますが、それでも浮き上がっていく様子は不自然でした。

まるで何かに引っ張られているような……。

いや、そうか。引っ張られているんだ。銃口からワイヤーが伸びている特殊な拳銃によって。

私の木刀を空中で避けたのと同時に発泡し、屋上の屋根にワイヤーの付いた弾を着弾させ……恐らくだが、繋がっているワイヤーを巻き付ける機能がついた拳銃が彼を上へと引っ張っているのでしょう。

彼はそのまま3階まで登ると、校舎の中へ入って行きました。恐らく距離を取るためか……このまま雲隠れする為でしょう。多分ですが、学校への侵入とあってか黒虎の装備も不十分。装備を整えられてから襲ってくる可能性がある。

なら、装備を整えられる前に今叩かなくては。

「壁登りが出来るのは貴方だけではありませんよ」
私は木刀を仕舞い込みながら少し助走して跳躍します。次に一階の窓の縁を足場にもう一度跳躍し、更に二階の窓縁下に足を掛けて跳ぶ。続けて二階の窓の縁を掴みながら、勢いのままに腕に力を入れて下半身を上へと持ち上げます。
こうすると鉄棒の大車輪を思い出しますね。ですがあの時の様なヘマはもうしません。
手を離して空中で一回転し、三階の窓の縁へに手を掛ける。そして最後の一踏ん張りと力を入れて上半身を持ち上げ、黒虎が侵入した窓から校内に侵入しました。
辿り着いた先は教室が列ぶ廊下。左右に目を向ければ、私の侵入に気付いたらしい黒虎が振り向いた姿勢のまま、あり得ないものを見たような表情で固まっていました。
「隙あり！」
仕舞い込んでいた木刀を抜き放ち、彼目掛けて投げ飛ばします。
しかし流石は悪名高い黒虎。当たる直前で軽く首を振って避けられてしまいました。
彼が木刀に気を取られている間に走り出していた私は距離を詰めて襲いかかろうとしますが、間合いに入るよりも先に銃口を向けられる方が早かった。
彼の目線と銃口からある程度の弾道を予測、発砲タイミングに合わせて斬り落とせば距離を詰められそうです。

そう考えていた私を嘲笑うかのように、彼は何故か私から銃口を逸らして壁へと発砲しました。

「なにを、ッが!?」

脇腹に、激痛。

体勢が崩れる。

視界が揺れる中、何とか倒れるのを防ぎますが足が止まってしまう。

「貴女を甘く見ていました。ここからは本気でやらせて頂きます」

黒虎の声が聞こえてくる。直後、悪寒。

直感を頼りに身体を前へと倒せば、頭の上をゴム弾が高速で通り抜けていく風切り音が聞こえた。

「ヴゥ!?」

次に太腿に激痛。だけどそれが気付け薬の代わりになってくれたらしい。視界が定まり、黒虎の様子が見えた。

それは二丁の拳銃を壁と天井に向けた姿。銃口からマズルフラッシュが見えた時には私の右肩と左手に衝撃が奔り、後方へと強制的に身体が退いてしまう。

「ッ……」

的外れな発砲。しかし、外れた銃弾が私に当たる原理はすぐにわかった。

ゴム弾による跳弾。周りが鉄筋コンクリートだからこそ出来る技。実弾では貫通してしまう為こうはいかないが、ゴム弾だからこそできる技だ。加えて、跳弾する方向を正確に予測して私に当てる精密さ。

ここはただの学校の建物だ。コンクリートだけでなく、木造に窓ガラスだってある。幾らゴム弾でもガラスを割ったり、めり込んだりしてしまう。なのに、コンクリートだけを選び取り私に当ててくる。

絶体絶命。そう思った。

だけど私は負けられない。若の命に危害を加えようとする輩がいる以上、私は負けてはならない。

そう覚悟を決めて再び黒虎に目を向ければ……奴は構えを解いていた。

「もう止めましょう。周りを壁で囲まれた貴女に勝てる見込みはない。それに、お嬢のご友人をこれ以上傷付けたくありません」

いつの間にか射撃が止んでおり、黒虎が私にそう声を掛けてきたのだ。

私の頭が真っ白に染まる。勝てないだとか、傷つけたくないとか……ふざけた事を告げてくる奴の言葉が、私の心を突き立ててくる。

「貴女の主を攻撃しようとしたのは……謝ります。お嬢のパートナーに相応しいのか確かめたくなってこの様な暴挙をしてしまった。しかし、言い訳になりますが殺すつもりは最初から無かったのです。一条楽に攻撃はもうしません。信じてくださ――――

「うるさい」

奴の休戦の声を遮り黙らせる。

……なるほど。どうやら主である千棘さんの事を想うがゆえに暴走してしまったと。まあ、わからないでもない。うちの組の連中も若の事となるとよく暴走してしまうから、恐らく似たような物なのだろう。

「なぁアンタ」

もう若に危害を加えない。確かにそれが本当ならばもうこの男と戦わなくて良い。若の警護という任務は達成された。めでたしめでたし。

巫山戯るな。それで全てが通ると？

「極道ってのは掲げた代紋とメンツで生きてんですよ。だってのに、敵に情け受けて喧嘩止めてもらって……それで若を守りましたなんて口が裂けても言えねぇんですよ」

極道は嘗められたらおしまいです。父から何度も聞かされた言葉。

なのにこの結末。敵に庇護を受けて助けられるなんて、許せる筈がない。侮られている状態のまま終わるなんて、私の顔に泥塗りたくられたまま帰らせるなんて、絶対にさせない。

もう、ビーハイブとの抗争なんて関係ないのだ。集英組組員である私が嘗められたままなど、組の沽券に関わる問題。これだけはどんなに両者で血が流れようと無視できない事。

それに、私個人としても奴にどうしても許せない部分がある。

「構えてください、黒虎……いや、鵜誠士郎。ここからはただのメンツの問題。嘗められたまま帰れない」

木刀を両手で握り、構える。私の覚悟の現れを見てか、困った表情から一転、精悍な顔立ちとなって彼もまた自然と構えた。

その様子を見て、私はまた苛立ちを募らせる。やはり絶対にこの男とは相容れない。絶対に負けたくない。そう、強く思う。

何故なら。

「集英組若頭補佐　佐々木理央の名。甘く見てんじゃねぇよ!!」

マジで、顔の良さが気に入らねぇからだ!!!!!

そのイケメンフェイスで勉強も運動も性格も良くて、凄腕のヒットマンとか言うモテる要素てんこ盛りのお前が許せないイイイイ!!!!!

万感の想いを持って駆け出す。

当然奴もまた跳弾を利用した射撃を行おうとするが、それよりも前に私は窓際へと寄った。

「なっ」

一瞬撃つ事を躊躇った誠士郎。それは私が素早い挙動をしたからではなく、跳弾の出来ない窓ガラス方向へ寄ったからだ。

換気の為か開いている窓も多く、また割れて跳弾出来るかも怪しい窓ガラス。それでもガラス縁に弾を上手く当てて跳弾させていたようだが、ここまで寄れば跳弾に使える縁は使い辛いだろう。

気にしなければならないのは天井と地面と、教室側の壁だけ。

「一芸だけで私に勝てると思うな」
3方向、しかも壁側の角度から来る弾丸だけなら、避けるのは難しくない。
首を振って弾丸を避け、木刀で弾き距離を詰める。そのまま奴の懐に入った瞬間、木刀を横薙ぎに一振りする。当たる直前に木刀の腹に銃弾を撃ち込まれるが関係ない。奴の腕ごと胴体に打ち込んだ。
「カハッ!?」
「――――アぅッ！」
吹き飛んでいく奴に更に追撃を加えようとするが、誠士郎が空中で発砲した跳弾が私の身体に突き刺さり、後方へと身体が下がってしまう。
ゴム弾とは言え、凄く痛い。衝撃で後に転びそうだ。耐えようして耐えられる物ではない。今頃私の身体中に打撲並の痣と内出血跡が沢山出来ているだろう。
だけど今の一撃で誠士郎の片腕もかなりダメージを与えたはず。射撃にも多少の――――
「……わぷっ！」
これまでの複雑な軌跡を通る跳弾とは違う、真っ直ぐ飛来してきた弾を切り落とそうと木刀を振るった直後。

私の顔面に大量の液体が掛かった。
「ッ……ペイント弾か」
瞼を閉じて目にペイントが入ることは防いだが、視界は最悪だ。すぐに拭おうとするが、その間に何発ものペイント弾が私の身体に当たる。
真っ赤に染まる視界でポタポタと水滴が床に落ちる音が聞こえた。
「ふざけてるんですか?」
「いいえ。ただ、貴方の視界を遮りたかっただけです」
軽やかな足音が連続で聞こえる。徐々に遠ざかっていく音から、恐らく逃げるつもりなのだろう。
慌てて私も彼を追い掛けて走り出すが、牽制のためか拳銃を構える気配。視界の悪い今、弾斬り落としは難しいと思い横に跳んで避けようとした。
「あっ」
足が滑って体勢が崩れる。
そういえば私、保健室で寝てたまま飛び出したから靴下だった。廊下もワックスが掛けられたばかりだし、さっきペイント弾で床も濡れて滑りやすくなっていた。

単純な判断ミス。しかも凡ミス。しかし、今回だけは致命的なミスだった。
左眼に物凄い衝撃がした。思わず首が後へと曲がる。
だけどそんなことが気にならなくなるくらい、左眼が…………熱い。
「あが」
焼けるような痛みに、声が抑えきれなかった。
「おぉぁぁあ゛あ!!!!゛!!!!?!?!?」
「佐々木様ッ!!」
痛いッ、痛いッ痛いッツッ
弾丸が目に当たったのか？　まずい、逃げられてしまう。だけど、今の私がどんな状態なのかわからない。目の痛みでどうにかなってしまいそうだ。もう、前後左右どっちなのか、わならな
「うぅ………」
何かにぶつかった気がした。そしたら、身体が傾いた様な気がする。そういえば………私、窓際にいたような。

「あ――――ー」

突然の支えを失ったような浮遊感。目が開けられないけど、多分窓から落ちた。

受け身を、取らないと。でも、3階から落ちたら流石に無理、か。

命の危機を察したら、流石に目の痛みよりも本能的な恐怖が勝ったらしい。頭が急に冴え渡る。でも遅い。もうすぐ地面が迫っている事だろう。

なんとも……儚い命だった。

「佐々木様ぁぁあ!!!!」

ふと、誰かの叫び声が聞こえた。それと同時に、柔らかい何かが私を包み込んだ気がする。

それはなんだか、凄くいい匂いだった。

決着と一つの真実

Q．3階から落ちたら人はどうなりますか？

A．下がプールだったので全身びしょ濡れになります。

そんな馬鹿なと思うかもしれないけどなっとるやろがい！

ただいま私は校舎のプールの中にいます。そのプールに3階から落ちたので無事でした。運が良い。

ただ困ったことがあります。それは私の左目が上手く開かないと言う事と、濡れた服の重量もあってか気絶した人間は重いということです。

はい。気絶しているのは何を隠そう、私の左目を潰して3階から落とした輩こと鵜誠士郎君です。幾ら水に落ちたからとはいえ、全身で水面に叩きつけられたのだから普通に無事じゃ無かったようです。え、私？　私は……この男に助けられたから大丈夫でした。

私を落とした癖に助けに入ってそのまま気絶とかダサいですね。マジ笑っちゃいますわ……嘘です。身を挺して助けるとか、普通にかっこいいです。これが女の

子だったら惚れているところです。まあ、落とした張本人でもあるからマッチポンプどころの騒ぎじゃないですけど。

「あ〜〜、目が痛い〜」

怪我の身体に鞭打って気絶中の彼を更衣室まで運びます。本当はこの男を置いてさっさと病院にでも行きたいですが、助けてもらった手前、恩を仇で返すような事は仁義に反する行いです。

水を浴びて文字通り頭が冷えました。いい加減この無駄な戦いを止めようと思えた。彼に戦う気は無かったし、その態度も悪気は無かった。私の存在が伝わっていなかったのは、彼の上司であるあのクソメガネのせいだし、彼は知らなかっただけで悪く……なくは無いけど。若に危害を加えようとしたし。

でも、敵意剥き出しの私に対して彼は真摯だった。最後は身を挺して助けてくれた。

三階から水面に叩きつけられたのです。私も彼も入院レベルの状態。せめて彼が起きるまでは面倒を見てあげても言いと思えます。

「取りあえず服が邪魔です。このままだと身体が冷えて怪我が悪化するかもですし、脱がしましょうか」

ポチポチとブレザーのボタンを取って脱がしていきます。起きないですね。息はしてますが、かなり危ない状態なのかも。

取りあえず次はYシャツを……この人、どんだけ武器を服の下に装備しているんでしょうか。そりゃあ重い筈です。防弾チョッキなのか、胸部分のYシャツが盛り上がっていますね。視界が霞んでいるので詳細はわかりませんが、Yシャツが透けて見えるピンク色の防弾チョッキが、形も相まってまるでおっぱいみたいです笑笑。

邪魔なのでこれも外しますか。

「ふむ……なんか、柔らかいですね。コレ。最新の防弾チョッキはクッション性がエグいなぁ。反発力もある。触ってて癖になりそう」

「ん……」

おや、寝苦しそうですね。やっぱり色々と装備していてキツイのでしょう。さっさと外してあげますか。

私はYシャツのボタンを一つ一つ外していきます。なんか、意識の無い人を脱がすのってドキドキしますね。髪とか服とか濡れて色気が凄い。イケメンってすんごい。

ボタンも全て外して、防弾チョッキを外そうとYシャツの前を開きました。すると、なんということでしょう。きめ細やかな肌に、膨らんだ胸、鮮やかなピンクの下着がーーーー

「……はっ？」

見間違いでしょうか。防弾チョッキなど何処にもなく、なんか男の上半身には無いも

のが見えるんですが。え、造り物？

その大きな膨らみをほにゅほにゅと揉んでみます。吸い付く様な手触りは今まで生きてきた中で最高の触り心地です。まるで乙女の肌。それに、弾力と柔らかさを兼ね備えたソレは揉んだこともない女性のおっぱい……

「あの、佐々木様？　何故、私の胸を揉んでいるのですか？」

何故だろう。かなりハスキー声だが、男にしてはあまりにも高過ぎる声。顔を見れば中性的というか、女性側に偏った顔立ち。全身びしょ濡れの中、透けたYシャツ一枚……いつの間にズボン脱げてたの？

そこには文字通り、濡れた絶世の美女が少し頬を染めて私を見ていた。

どうやら知らない間に、私は犯罪を犯していたらしい。

「すみませんでした!!!!」

「佐々木様?!」

私は土下座した。床に頭を叩きつけ、振動で響く目の痛みなど放り捨て、土下座した。
てか、まて。いつから私が脱がしていた人間はイケメンから美少女に変わっていた？
普通、男から女に変わったら気付くだろう。え？　この短時間に性転換でもしました？
「あの、何に謝られているのかわかりませんが佐々木様……左眼は大丈夫なのでしょうか？」
凄えなこの子。犯されそうになっていたのに犯人の怪我の心配とか聖女かよ。あー……こんな可愛くて優しい女の子と結婚したいデフ。おっと心の声が。
はぁ……くだらないことを考えていないで、もういい加減認めよう。私の目の前にいる、先程まで戦っていたビーハイブの凄腕ヒットマンさん。ずっといけ好かないイケメン野郎だと思っていた、黒虎こと鵜誠士郎さんはーーーー
私のドストライクど真ん中の超美少女でした。
アイエエエエエエ!!!?　なんで!?　なんで美少女???
やばいよさっきまで私この子に思いっ切り暴言吐いたしなんなら木刀で何回も殴り

かかっちゃったよ。しかもこんな人気のないところに連れ込んで意識のない彼女の服を脱がして胸まで揉んじまった!!ヤバイヤバイヤバイ!!暴行罪と強姦罪で捕まる!?終わった終わった私の極道人生終わった女の子に手を出して勤めに出るとか恥晒しでしかない明日の週刊誌に集英組若頭補佐佐々木理央が女子高生に強姦か!?とか載っちまうううう!!!

「本当に申し訳ございませんでした。エンコですかエンコですよね？一本で足りますか足りませんよね？なら三本一気に行っちゃいますか待っててください今家庭科室行って包丁とまな板持ってきてここで指斬り落としますんで」

「佐々木様!?　そんな事しなくて大丈夫ですから！　落ち着いてください!!」

いやいやいや。これが落ち着いていられますか。死活問題ですよ。

ですが安心しました。意外と彼女、何も問い詰めてきませんね。まあ私、傍から見たら重症患者ですもんね。左目からは血を流し、身体中痣だらけ。良識ある人ならこんな怪我人を追い詰めるようなことしませんか。やるとしたらこういう怪我も慣れているヤクザかマフィアくらいーーーー

ガクガクブルブル

「佐々木様!?　やはりお怪我が辛いですよね！　こんなに震えて……」

いいえ。報復を恐れています。
ま、まあまだ大丈夫。鵜さんは気にしてないようですし、後は他の人にバレなければ問題ない。
その時、私は更衣室の外から複数の声が聞こえた。
ーーーー次の瞬間、私の脳がフル稼働して状況を確認する。
目の前には半裸の、しかも事件性のあるびしょ濡れな女子高生。襲いかかるは反撃されながら迫りくる左眼流血男。そしてここは……視界不良だったせいでよく見てなかったけど、もしかしなくても女子衣室。
状況判断中のこの間、０．５秒。結論、状況を隠蔽しなければならない。
私は大慌てでブレザーを脱ぎ、物凄いスピードで彼女に被せた。しかし、左眼で目算が狂ったのか勢いが余ってしまった。
「あっ」
「へっ？」
本来なら、私も彼女もこのくらい簡単に対処できる。しかしお互いが戦り合ったせいで体力は失い、身体が冷えてきたせいで思ったように動けない。しかも、濡れているせいで滑るおまけ付き。
彼女を押し倒し、諸共床に転がる。何とか起き上がりせめてもと早業でボタンを締め

に掛かるが……遅かったようです。

「あっ」

女子更衣室の扉が開けられた先には、驚いた様子で固まる千棘さん含む女子クラスメイトの皆さん。彼女等の視界にはびしょ濡れ半裸男が女子生徒を押し倒して強姦する犯罪の場が写っている事でしょう。

ああ……ビーハイブに関わると碌な事がない。

そう思う一日でした。

▽▽▽

その後はまあ色々とありましたが、私の学校生活及び身分が地の底に落ちたであろうこと以外、私と鵜さんは無事入院することが出来ました。

鵜さんは全身に軽度の裂傷と背中の打撲及び鞭打ち症。最後に右腕の骨に罅。

私は全身に計１０箇所の打撲と軽度の眼球損傷。二人共手術と入院確定しました。

あと、喧嘩両成敗ということで二人して停学になりました。揉み消せることは出来るには出来たのでしょうが、自分の尻くらい自分で拭きたいと思い受け入れました。まあ、所詮は極道者とマフィアのヒットマン。停学なんか屁でもないくらいの悪事を働いているので全く気にしません。形だけのケジメですが、謹慎みたいなものと思って償いの時間に当てようかと。

「あ、あの」

取りあえずまずは誠心誠意謝った後で、身の回りの整理をしないといけない。これは私への罰。償わなければならない禊である。

「も、もう頭を上げてください佐々木様ぁ……」

「無理です。本当に申し訳ございませんでした」

土下座である。プライドなどかなぐり捨てた土下座。

取り返しの付かない事をしてしまった。女の子相手にガチギレして容赦無く襲かかり、嫁入り前のその身体に傷を付けてしまった。てか木刀で殴った。その後は気絶した彼女の身体を触る等のクズ行為。私は世間様に顔向けできない程の極道であるが、外道にはなりたくないと思っていた。ならばやってしまったことを悔やむより、誠心誠意謝らなければいけない。

「こここここれ私の通帳です。全財産が５００万くらいあるので、せめてこれでお願いします。示談で、なんとか、許してください」

ごめんなさい。誠心誠意の欠片もありませんでした。情けなくも鶫さんに警察沙汰にするのだけは辞めてほしいと懇願してました。

こんな、情けない理由で捕まりたくない。捕まるならせめてもっと極道らしい理由で捕まりたい。なんだこれ？　少女への暴漢罪で捕まるとか情けなさすぎる。

どっちも情けないなら、一時のプライドを捨てて懇願する方がマシである。

「佐々木様、悪いのは私です。決闘などと体の良い言葉で協定を破り、抗争を起こす様なやり方をしてしまいました……一条楽がお嬢に相応しい男なのか確かめようとしたばかりに。貴女を傷つけてしまい、申し訳ありませんでした」

「えっ……」

謝られた。これだけの酷いことをしてしまった私を許すどころか、非は自分にあると謝られてしまった。

私とて今回の件については思うところはありました。しかし、事情を聞いてみれば千棘さんを懸けた決闘と言う話ではありませんか。鶫さんもちゃんと非殺傷弾を使っていたし、暗殺とかでは全然ありません。ただただ、千棘さんを想う幼馴染兼部下の女の子が主を託せる相手かどうか見定める為の行いだった。

事情を聞かなかった私も悪い。そうであれば私は若の勇姿を見ようと喜んで送り出したのに。

そんな話も禄に聞かず、キレて襲い掛かった私を許すどころか謝る鵜さん。

天使かな？　なんて優しい人なんでしょう。しかも美少女だし。うっ……後光が見える、なんて神々しいんだッ。

でも……なんだろ。病衣姿で落ち込んだ様子の彼女が神々しさと同時に色気も醸し出している気がする。なんか、エロい。あとおっぱいがでかい。てか病衣を押し上げてコレでもかと主張するあのおっぱいを揉んだんですよね、私……

ぐへ、ぐへへ……

ーーーーおっと涎が。

しかし、こんな美少女の胸を揉んだとなれば尚更に私の罪が悪化するな。死刑も免れまい。それは嫌です。

「わかりました。鵜さんがそう仰るのならこの件はどちらも悪かったということでお互いチャラにしましょう。その方が気が楽です」

「し、しかし佐々木様は左眼が……」

「ああ、これは大丈夫ですよ。極道なら眼帯付けてる方が格が付きますし。名誉の勲章

とでも皆に言っておきます」

「……」

ハッハッハッ！　たかが左眼の怪我で私の罪（おっぱい揉みまくった事等）が許されるならこれぐらい屁でもないね、うん！　てかむしろお願いします！　土下座でも何でもするんで許してください！

「……佐々木様がそう仰るのなら、わかりました」

キタァァァーーーーー。。＋．ヽ（＾∀＾＊）ノ。＋．。!!!!

言質は取った！　イヤッフゥ!!　美少女のおっぱい揉んだ事皆に自慢しよ！　絶対集さんとか羨ましがるでしょうね！　だが残念!!　私は既に貴様らの一歩先を行ったのだ。

「ですが、今度埋め合せをさせてください。そうじゃなきゃ私は自分を許せない。佐々木様が願うことなら私は、出来ることなら何でもします」

……ん？

いま、なんでもって言った？